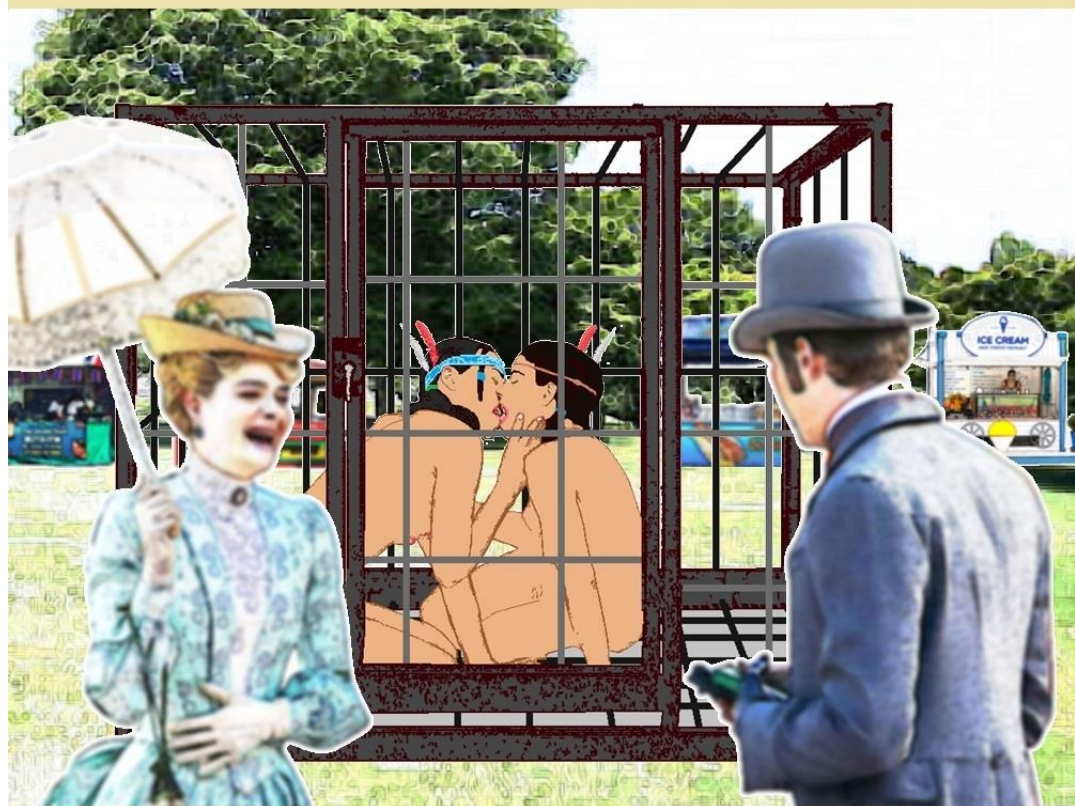


蕾の悦虐（ロリマゾ）

アメリカ西部開拓編

檻の中の野生児



原 案 W I L L 様
小説化 濠 門 長 恭

目次

森の中の畏.....	- 2 -
監禁と虐待.....	- 16 -
銃殺と縛首.....	- 32 -
子供の玩具.....	- 51 -
屈服の兆し.....	- 66 -
新たな獲物.....	- 76 -

痛姦姉妹愛

部族と訣別

玩具の日々

亜人動物園

明日も幸せ

後書き

表記に関する注意

この小説では、先住民族であるヒロインが使う言語と侵略者である開拓民が使う言語を、共に日本語で表記します。両者の区別をつけるために、WORDのフォント機能を利用しています。

- ・先住民族の言語は、明朝体を使います。台詞は「鍵括弧」でくくります。
- ・開拓民の言語は、ゴシックを使います。台詞は『二重鍵括弧』にします。
- ・開拓民の台詞でヒロインが理解できない部分は、文字を薄く表示します。

森の中の罠

森の手前には見渡すかぎり杭が立てられて、杭と杭の間には棘の生えた鉄の線が張り巡らされている。東の方で牛をたくさん飼っている白い人たちが、精霊の住まう森を自分達のものだと言って、勝手に囲ったんだ。ところどころに木の板が掛けてあって“**K e e p O u t**”なんて大きな模様が描かれてる。

おれたちズンナック族の大人が白い人たちと掛け合ったんだけど、火を噴く棒で脅されて引き下がった。森はここだけじゃないし、白い人たちはどんどん増えているから、森の分け前もたくさん入り用なんだろうって、大人は白い人たちの言い分を受け入れてしまったけど。

おれは、この森じゃなきゃ駄目なんだ。

白い人たちは、森を囲っただけで、木の実を採りにも木の枝を拾いにも来ない。もちろん、手入れもしない。森の精霊は悲しむだろうけど、おれには都合が良い。

大人の腰の高さしかない囲いなんて、簡単に跳び越えられる。

森に入ると、さっそく兄弟を見つけた。木の枝にちょこんと座って、団栗をかじってる。「見るなよ、恥ずかしいじゃないか」

もちろん、おれの言うことなんか分かつちゃないけど、声を掛けられてびっくりしたんかな。すささっと隠れやがんの。そんなにはっきりと見分ける自信はないけど、たぶん初めての顔合わせだ。兄弟なのに初めて会うなんて——なんだか笑っちゃうな。なんて、後ろめたさをごまかしてる。

あ。栗鼠と兄弟ってのは、おれの名前も栗鼠^{ハゼツイ}だから。女の^{しるし}徴が訪れて一本目の赤い羽根をもらったのがこないだの冬だから、まだ二つ目の名前はまだらってない。けど、生まれが近い男の子たちは、おれのことを平原の栗鼠^{ハルガイ・ハゼツイ}なんて呼ぶんだぜ。平原てのは、山や丘と

違って真っ平らだろ。

まったく失礼なやつらだ。ひと巡り前の夏だって、低い丘くらいにはなっていたし、十五回も夏を迎えた（全部は覚えてないけど）今じゃ、手を丸めても掌の底で乳首を押し潰せるんだぞ。そりゃまあ、ひと巡り後に生まれた女の子たちと比べても……いいや、他人と比べても意味はないさ。同じ数だけ季節を巡った仲間のうちで、いちばん背が低いってことも、意味はない。おれはひと巡り先に生まれた男の子よりも速く走れるし、高く跳べる。これは男の子なら、すごく意味があるんだけどなあ。女は狩りもしないし、外敵とも戦わない。男の子みたいに筋肉が引き締まっても、女の子らしくないなんて、からかわれるし。それでも、おれはおれだ。^{ディニスクオス・ダットツオ}煌めく朝露さんをうらやましく思ったりしない。

なんて、どうでもいい（よくない！）ことを考えながら歩いてたけど。^{チジッディ・アブレ}木の精霊が見えてくると、他のことは頭から消え失せた。

見通しの悪い森の中で、じっくりと辺りを見回して耳を澄まして。うん、人の気配はない。

「今日も、おれと遊んでくれよな」

倒れている大きな樹にお願いをしてから。おれは着ているものを全部脱いで下帯まで取り去り、靴も脱いで裸になった。頭の羽根飾だけは、魂みたいなものだから着けたまま。

魂とは関係なく。羽根飾は髪をまとめる鉢巻でもあるから、取っちゃうと肩からふた握り垂れている髪が散らかってうっとうしいものもある。両側に分けて三つ編みにしてる女の子も多いけど。それはそれで、走るとぽんぽん跳ねて気が散る。女の子が全力で走るなって、大人には言われるけど。風に吹かれて髪がなびくのが、おれは好きなんだ。うん、分かってる。後ろめたいから、どうでもいいことをぐちゃぐちゃ考えてるんだ。

服を着てなきゃいけない場所で、男なら狩りをしたり、女なら木の実を採ったり枯れ枝を集めたり、仕事をする場所で真っ裸になるなんて、すごくいけないことをしてるんだから——胸がどきどきして、腰の奥がきゅうんとねじれてくる。木の精霊が目の前に居るもんだから、この春に春を迎えた（生えてきたなんて、羞ずかしくて口にできない）おれの

割れ目が、じゅんって粘ついてくる。

樹が裂けたちょっと上には、大人の男棒と同じくらいの太さと長さの枝が突き出ている。縮かんでるときのじゃなくて、女の人と番^{つが}うときのやつ。おれだって、見たことくらいあるし、季節が幾つも巡らないうちに、三つか四つくらい季節をたくさん巡ってる素敵な男の人に求められて、割れ目の奥の女穴に挿れてもらって、彼から二本目の羽根をもらうんだ。

男とそんなことをするなんて絶対に厭だって言う娘もいるけれど。おれはちっちゃい頃から、その日がくるのを待ち遠しく思ってる。だって、男は強くて女は弱い。強い者が弱い者を（いろんな意味で）組み敷いて当然だ。その代わり、弱い者は強い者に甘えて、護ってもらう。

だから、その日のために今のところは、こっちの枝は我慢しとく。チジッディ・アブレは羽根をくれないもんな。

その太い枝から一步半離れたところに、瘤が盛り上がって指一本より少し長くて倍くらいに太い枝が立っている。瘤も枝も、ちょこっと樹皮が剥がれてきたけど、そのささくれが凄いんだから。

おれはチジッディ・アブレに跨がった。さすがに、組み敷いてくれないもんな。男と女でも、こういう形があるのも知ってるから、それは不満じゃない。

跨がると割れ目が自然と開く。その内側を瘤のところに押しつけた。割れ目からはみ出たちっちゃいびらびらが樹皮にこすれて。

「あんんっ……」

腰がびくんって震えた。その動きが、さらにびらびらと樹皮をこすり合わせて、ちょっとくすぐったくて、ちょっと痛くて、滅茶苦茶に気持ちいい。尻から脳天まで、鋭いそよ風が駆け昇る。そよ風に乗って身体がふんわか漂って——ぱちんと爆ぜる。前はこれで満足してたけど。この春に、萌え出た草を弄ってるうちに、もっとすごいことになるって知ってしまったんだ。

おれは腰を前へ突き出した。割れ目の端っこにある小さな肉の蕾が枝に押しつけられて、そよ風が強い風になる。

「あああつ……いいよお」

熱い強風が、おれの全身を揺すぶる。だけど、もっともっと風を強く煽れるんだ。枝にこすり付けたまま、くいと腰を浮かすと——肉の蕾がきゅると綻びて、中に隠れてた芽が剥き出しになって、それが樹皮に触れると——もう、強風でも疾風でも颯風でもない。夏の暑い日に大雨を呼ぶ激しい雷。

ぐわらら、ずっどーん！ 頭が真っ白になって、身体が砕け散るような、わけの分からない感覚が、おれを吹っ飛ばした。

「ふわああああ……」

ばらばらになった身体を、後ろへ倒して——人影に気づいて、幹から転げ落ちた。

「誰だ?! 今の……見てたのか?!」

うろたえて、分かりきったことを尋ねちまった。見れば、白い人だって分かるし。二人の男は、にやにや嗤ってる。

『言っただろ。集落に警告なんかせずに、こっそり見回ろうぜって』

『さすがにジェスは策士だな。面白い獲物が掛かったもんだ』

白い人たちの言葉を言い交わしながら、おれに近づいてきた。ひとりは片手で持てる短い火を噴く棒を、もうひとりは縄束を持っている。

『オーケー。おまえは私有地に無断侵入した。州法第三十五条を適用して、私人による現行犯逮捕を執行する。これでよかったっけな?』

『いいんじゃないか』

縄束を持ってるほうのやつが腰を曲げて、おれに向かって手を差し伸べた。親切で引き起こしてくれるんじゃないくらい、羽根飾のない子供にだって分かる。それに、白い人とは関わるなって言われてるし。なんてことよりも——おれ、男の前で真っ裸なんだぜ！

なんて、一瞬のうちに考えるよりも早く身を起こして、脱ぎ捨てた服に向かって突進し

た。服を拾い上げようとしたとき。

だあん！

目の前で、服から生地の破片と土煙が飛び散った。

『動くな。次は足を射つ』

もうひとりのやつが、火を噴く短い棒をおれに向けている。火だけじゃなく小さな硬い団栗が飛び出て、それは矢よりも強く人や物を傷つける。言葉は分からなくても、動けば二発目がおれに向かって火を噴くだろうとは分かる。

おれに手を差し伸べた男が、目の前に立って。

『せっかく裸になってくれてるんだ。何もせずに連れてくつてのは、ビッチに失礼じゃねえかな』

『違いねえ。ダニー、背中を頼むぜ』

『やっぱりかよ』

目の前の男が何歩か下がり、火を噴く短い棒を腰の鞘から抜いて、おれに向けた。それまで火を噴く短い棒を構えていたやつは、それを腰の鞘に納めて。帯と鞘を、おれのチジューディ・アブレの上に置いた。そして、股の部分が大きく開いている革の袴も脱いでから、おれの前に立った。

『おとなしくしてりゃ、ちっとは優しくしてやるぜ』

おれたちのと似た袴を脱いで——へえ、袴を重ねて着てる。おい、ちょっと待てよ。それも脱いじまうのかよ。脱がなきゃおしっこもできないんで……うわわ、むくむく大きくなった。

冗談じゃない。こいつ、おれと番う気なんだ。やだよ。まだ（ほんのちょっぴり）早いってだけじゃない。こいつの羽根なんか、もらいたくない。おれは、ズンナックから出るつもりはない。

逃げるために、おれは横に跳んで火を噴く棒の狙いを外した……つもりだったけど。下半身丸出しの男が横に蹴り出した足につまずいて、無様につんのめっちゃまった。ふだんな

ら絶対にしない失態だ。おれ、動転してる。

男は、俯せに転がったおれを馬乗りになって押さえ込んで、両手を背中にねじ上げた。

『ダニー、縄をくれ』

こいつら、飼っている牛を投げた縄で捕まえて、牛が厭がっても囲いの中へ引きずり込む。だから、いつも縄を携えている。

「やめろ！ おれは家畜じゃないぞ！」

文句を言ったけど、通じない。しかも、こいつはおれより重たいし力も強い。ろくに抵抗もできず、後ろ手に縛られちゃった。

『いい子にしてたら、すぐ終わらせてやる。それとも、じっくり可愛がってほしいか？』

見物してるほうが、げらげら嗤う。くそ、何がおもしろいんだよ？！

馬乗りになっているやつが、おれを仰向けにひっくり返して、おおいかぶさってくる。

くそ。やめろったら。おれは、思い切り膝を蹴り上げた。

がしんと、骨と骨とがぶつかり合う硬い衝撃の中に、軟らかい何かが潰れるような感触が混じった。

馬乗りになったやつが、もんどり転げる。

おれは跳ね起きて、森の奥へ逃げ込もうとした——けれど、手が使えないと身体の平衡が取りづらいし、顔に当たりそうになる木の枝は身体全体でかわさないといけない。栗鼠ハゼツイイともあろうものが、あっさり屍肉デーレーチャアツイ啖に捕まっちゃった。

引きずり戻されると。両手で股ぐらを押さえてびよんびよん跳びはねていた男が、ものすごい形相で詰めよってきた。

『このくそビッチが！』

がしん！

拳骨で頬を殴られた。目の前が真っ赤に染まって黄色い星が飛び交った。

『チンポの代わりに鉛玉を食らわせてやってもいいんだぞ』

もう一発頬を殴られ、腹にも拳骨を突き入れられた。身をかかわそうにも、後ろから二

の腕をつかまれているから、動けないどころか、ぶっ倒れることすらできない。

「うぶっ……ぐええええ」

二発三発と腹を殴られて、激痛といっしょに苦い水が口にあふれる。

それでも男の怒りは治まらずに——仕返しとばかりに、股ぐらに膝頭を蹴り込まれた。

二の腕をつかんでいる手を放されると、おれは自分の重みを足で支えられなくて、地面に崩折れた。

『くそ、手間をかせさせやがって』

男はおれを見下ろしながら、男棒を手でしごいた。なかなか大きくなる。ちっと舌打ちして、おれの胸に靴をこじ入れて仰向けに転がした。靴の裏でおれの太腿を蹴って、脚を開かせる。

『まだ餓鬼だな。乳は薄いし、毛もろくに生えちゃいねえや』

目の動きと声の調子で、おれの姿形がぼろくそにけなされているのが分かった。くそ、ぺったんこでもつるつるでもないぞ。季節があとひと巡りもしてみろ。大人の女と同じくらいになる……かもしれないじゃないか。

さんざんけなしたくせに、ちゃんと男棒がおっ勃ちやがった。また、おれにのしかかってくる。

「やめろ！ やめろったら……」

また蹴ってやろうとしたけど、今度は足首をつかまれた。

「くそ！ 手を放せよ！」

もがいても、つかまれている足をひねりそうになって、激痛が走る。それでも、おれは諦めない。こんなやつに、他部族どころか肌の色が違う連中の仲間になんか、なりたくない。

『これじゃ罅が明かねえ。ダニー、ちょっと押さえといてくれ』

ダニーってのは、名前らしい。おれのことはビッチというみたいだ。二人が入れ替わって。ダニーじゃないやつは、おれの服を拾い上げると、おれの小刀で切り裂いた。

おれは、また裏返しにされて。縄をほどかれて、服の切れっ端で縛り直された。また仰向けにされて、両足をうんと広げられてから、片足を縄で縛られた。縄尻がそばの木の幹に巻きつけられ、背丈の倍くらい離れている木の幹を通してから、もう片方の足首に巻かれた。

ダニーが手を放しても、おれは脚を閉じられないばかりか、縄が頭の高さくらいで張られているので足も宙に浮いてる。

その足の中に、ダニーじゃないやつが立った。

「くそお……見るな！ 見るなったら……！」

見られるのを羞ずかしがってるどころじゃ済まない。そいつは、掌に唾を吐いて、それを男棒にまぶして。おれの割れ目に先っぽを押し当てて。

うわわわ……男棒が入ってきた。腰が浮いてるので、自分でもよく見えてしまう。

割れ目の縁と中のびらびらが男棒の先っぽにこすられて、ちょっとくすぐったい。と思っただのは、心臓が二つか三つ拍つ間だけだった。

割れ目の奥をぐうっと押されて、次の瞬間——身体が縦に割られるような凄まじい痛みが、股ぐらを奔った。初めてのときは痛いて聞かされてたけど……こんなに鋭く激しい痛みとは思ってなかった。

「ひいいいっ……痛い！ やめてくれ。抜いてくれよおお！」

抜いてくれるどころか。さらに、めりめりと押し挿ってくる。

『血まみれだ。脱いでおいて正解だったな』

『へえ。インディアンなんて、餓鬼のうちから親兄弟も見境なく交尾してるもんだと思っただけだな』

『いやいや。けっこう貞操観念てやつだ。ことに初めてとなると……』

『初めてとなると、何だっただよ』

『そのうち分かるさ。それよりも……さんざ手こずらせてくれたんだ。たっぷり泣かせてやらんけりゃな』

二人がしゃべっている間に、だんだん痛みは小さく（はないけど、我慢できるくらいに）なっていたのに。話が終わると、ものすごい勢いで腰を前後に動かし始めた。

激痛が跳ね上がる。ずん、ずん、ずん……穴の奥に突き当たる。

「痛い痛い痛い……動くな。お願いだから、動かないでくれよお！」

『何て言ってるんだよ？』

『知るか。母音が撥ねまわる言葉なんざ、聞いてるだけで頭が痛くならあ。おい。ちったあ静かにしろ』

『だけど、インディアンのこと、やけに詳しいじゃねえか』

『手懐けたビッチが言葉を覚えたんだよ。ポーカーで負けて、持ってかれちまったがな。だから、こいつを二匹目にしてやる』

『そいつは、どうかな。ミスタ・セイバーが、所有権を主張するんじゃないかな。ミスタ・セイバーの所有地に侵入したんだから』

『乗りこなせるなら、乗りこなしてみろってんだ』

おれの訴えなんか無視して、この男は荒馬を乗りこなすみたいに、おれの股ぐらの上で腰を跳ね続けた。

男が動きを止めて抜いてくれたときには、おれは半分気を失っていた。

だけど、陵辱は半分も終わっていなかった。

『おめえばっかりがいい思いをするのは癪だぜ』

『ふふん？』

『前が初めてだってんなら、後ろもそうだろうぜ。いいかな？』

『なぜ、おれに聞く？ ビッチに聞いてみろよ。ケツ穴にチンポを挿れてもよろしいでしょうかってな』

ダニーが、おれを犯したやつと場所を入れ替わって、おれを見下ろしながら何か話しかける。

『ビッチちゃんよ。ケツ穴のヴァージンをもらうぜ。いやなら、そういいな』

何か尋ねてるらしいとは、口調で分かるけど、言葉が分からないんじゃ答えようがない。
黙って睨みつけてると、なぜか満足そうに頷きやがった。

『厭じゃないってよ』

『そりゃよかったな』

ダニーが袴も下穿きも脱いだ。こいつは、最初から大きくなって上向いてる。

もがいても無駄だ。それに、男ってのは、男棒を使い終わったら——優しくなったり、素っ気なくなったりするもんだと、羽根が二つになったばかりの姐さんから聞いたのを覚えてる。かおとなしくしてたら、帰してくれるかもしれない。

と、そこまで覚悟を決めたのに。割れ目よりも下、尻穴に男棒を押しつけられた。

「違う。そこじゃない……」

おれは尻を揺すって、男棒から逃れようとした。

ばちん、ばちん！

頬に平手打ちを食らった。拳骨で殴られるのに比べたら、どうってことはないけど。逆らったら拳骨になるかもしれない。

思ってもなかったところを狙われてうろたえたけど。けっこう太いのだって出る穴だから、好きにしろって諦めた。汚れたとか、後で文句を言われて（も、わからないけど）殴られるのは厭だな……なんて考えは、ものすごく間違ってた。

めりめりめりと、女穴を割られたときよりも重たくて熱い痛みが、身体を真っ二つにする。女穴の痛みが手斧で断ち割られたようなものだとしたら、こっちは素手で引き裂かれて、そこに燃えている薪を突っ込まれてるみたいだな……

「ぎゃあああっ！ 痛い……痛いよおお！ やめてくれよお！」

『へへっ。悲鳴の大きさじゃ、俺の勝ちだな』

『おいおい。そのビッチは俺の女にするんだぜ。ちっとは遠慮しろや』

『へいへい。それじゃ、痛み止めを追加してやるよ』

ダニーは上体をかがめて、両手でおれの乳房をつかんだ。身体が前のめりになって、重

みが胸にのしかかる。

「苦しい。息ができない。やめてくれよ」

おれの声は無視して（言葉が分からないから、しょうがないけど）、**ダニー**はおれの乳首をつまんだ。指先で乳首をこする。

「あっ……？」

ぴくんと身体が跳ねた。乳首の先から小さな鋭い痛み——とは違う、何かが奔った。乳首をこすられるにつれて、その何かが強くなっていく。

「あっ……あんんん……何してるんだ。い……」

いやだと言いかけて、ためらった。厭じゃない。もっと続けてほしい。

『どうにも動きにくいぜ。ジェス、代わってくれよ』

『よかろう。ビッチの扱い方を教えてやるぜ』

ダニーが上体を起こして、また腰を前後に動かし始めた。**ジェス**が、おれの横に座りこんで、おれと**ダニー**がつながってるすぐ上のあたりに手を伸ばした。

『へっ。ぎゃあぎゃあ喚いてるくせに、きっちりおっ勃ててやがる』

ジェスの手が割れ目の上で合わさっているあたりを……

「ひゃうんっ……?!」

乳首をこすられたときに奔った何か。その百倍も凄いのが、その一点で破裂して、腰全体がふわあつと宙に浮いた。割れ目に隠れている蕾を木の精霊に押しつけたときと似ている。似ているけど違う。指は枝より柔らかいから、こっちのほうが気持ちいい。

『こりゃ、さっきの悪戯は初めてじゃなかったようだな。じゃあ、知ってるな。これはめしべとってな、女を淫乱に変える疣だ。この疣をこすられると……たまらねえだろ』

メシベ。その言葉だけが頭に残って……立て続けの何かに心も身体も破裂し続ける。

「ああああっ……だめ、やめてくれ……おかしくなっちゃうよおお！」

身体が宙に浮いて、ぶわあつと膨れて、ぱあんと破裂して。**ダニー**がおれから離れて立ち上がったのも、宙吊りにされている足の縄をほどかれたのも——夢の中でさらに夢を見

ているみたいな気分だった。

後ろ手に縛られたまま地面に転がされて。逃げようとしたって、どうせすぐに捕まるんだからと——諦めてる。ていうか、そんなことはどうでもいい気分。

男二人は、すっきりした顔でチジッディ・アブレに腰掛けて煙草なんか吹かしてるけど、おれの手をほどいてくれそうにない。ときどきこっちを見ては、にやにや嗤ってる。

おれは——夢の中の夢から醒めて。二つの穴がずきずき痛いのが残ってる。すごく惨めだ。それに不安だ。もしも**ジェス**が、おれを……まさかな。白い人が、おれたちの仲間になったことなんかないし、おれたちの誰かが、こいつらの仲間になったなんてこともない……はず。いや。白い人たちに住む場所を奪われて東から流れて来た部族では、たしか……

『さて、そろそろ戻るか』

ジェスが立ち上がって、改めておれを見下ろした。

『インディアン娘を合法的に捕らえるなんて、そうそうないことだ。遊びながら帰ろうぜ』

『遊ぶってどういうことだ？』

『こういうとき』

ジェスが、手首を自由にしてくれた——のは、服の切れっ端なんかじゃなくて太い縄でしっかり縛り直すためだった。手首が痛い。

縄はおれの背丈の五倍くらいも長い。その縄で腰を一巻きして、また手首に巻いて——縄尻を股ぐらにくぐらせてから引き上げて、前で腰の縄に結んだ。

なんだ、これ？ まるで縄を使った下帯みたいだ。でも女の部分を隠すんじゃなくて、割れ目に食い込んで痛いだけだ。それと——前は血まみれだし後ろは搔き出された茶色いのがこびりついてるし、そこに縄を通すんだから、肌になすり付けられて気色悪い。

『よし、歩け』

縄をぐいと引っ張られた。股ぐらを縦に通る縄がいつそう割れ目に食い込んで——痛みを和らげるには、前へ歩くしかなかった——んだけど。

「あっ……?!」

ちりちりっと、痛いようなくすぐったいような奇妙な感覚が股ぐらに奔った。割れ目の内側の柔らかく湿った部分に、縄の毛羽が擦れたんだ。

『さっさと歩け』

ばちいん!

尻を叩かれた。太い強い痛みだったけど、穴を貫かれたときの痛みと比べたら、悲鳴には値しない。振り返ったら、**ダニー**が革の帯を手握ってた。袴がずり落ちそうになるのを、左手で押さえている。わざわざご苦労なことだなんて呆れ掛けて——そうまでして、おれを虐めたいっていう執念に、ぞっとした。

『なに睨んでやがる。このインディアンめが』

ばちいん!

「きゃあっ……!」

乳房を水平に薙ぎ払われた。女穴を貫かれたのと比べ物になるくらいの鋭い痛みだった。また叩かれたくないから、前に向き直って。割れ目への刺激を堪えながら歩き始める。

ビッチというのがおれのことから、**インディアン**はおれたち全体のことだな。ひとつ賢くなった。それよりも、こんなときなのに、ちょっぴり嬉しいこともある。あれだけ強く叩かれたら、おれのささやかな乳房でも、ふるるんって弾むんだ。

『おら。もっと早く歩け』

縄を強く引っ張られて、脳天気な雑念は消し飛んだ。縄に追いつこうとして歩幅を大きくしたら——ぐりっと割れ目を抉られた。

「くう……」

足は前へ出ても、腰がついて行かない。おれ、無様な歩き方をしてるんだろうな。

『素っ裸で羽根飾だけってのも、いい眺めだな』

また、二人のおしゃべりが始まった。

『これを着けさせてりゃ、悪いインディアンを連行してるって、一目で分かるだろ』

『なるほどねえ』

『それに、羽根飾はビッチを手懐ける切札だしな』

『へえ？』

おれが森に入った所からはずいぶん離れた場所で、草原へ引き出された。二頭の馬が樹につながれている。かわいそうに、重たい座る台を背負わされて口に金具を嚙まされて、そこに首を左右にねじ曲げる紐まで結ばれている。馬は賢くて優しいから、言葉を掛けて首筋をちょっと叩くだけで、思い通りに走ってくれるのに。力づくでねじ伏せるのが、白い人たちのやり方だ。おれも、まさにそうされているんだと、今頃になって気がついた。

おれを縛っている縄の端が、座る台の後ろに突き出ている角に結ばれた。ジェスとダニーが馬に乗って、腹を蹴った。こいつらの靴の後ろには、棘のある小さな円盤が付いてる。馬は人よりも皮が厚いけど、それでも少しは痛いんじゃないかな——なんて同情をしてる場合じゃない。

馬が歩きだしたから、おれも引っ張られて、これまでよりずっと早く、小走りにならないといけない。転んだってジェスは馬を止めてくれず、おれは引きずられてしまう。きつとそうなるという確信があった。それくらいには、こいつらのことを分かりかけてる。

こんなやつに初めてを奪われたなんて、悔しい。

——縛られて裸足で小走り続けるのは、靴を履いて全力で駆けるよりもつらい。何度も転びそうになったし、足の裏も擦り剥けてくる。穴を貫かれた痛みが鈍くわだかまっているところへ、割れ目を内側からこすられ突き刺される鋭い痛みが重なる。

それなのに。鋭いちりちりする痛みの奥から、乳首をこすられたときみたいな（だけど、かなり苦い）そよ風が吹いてきて、それがだんだん強くなってくる。その気持ち好き——そうさ、認めるよ。痛くても苦くても、その奥に気持ち好きが混じってるんだよ。それがあから、おれはなんとか小走りを続けられたんだ。小走りどころか。もっと気持ち好くなりたくて、馬に追いつくくらいに駆けてみた。逆効果だった。縄を前へ引っ張られているから、強く食い込むんだと分かった。だから、引きずり倒されないぎりぎりまで、馬に

引っ張ってもらうことにした。脚を蹴りあげていれば勝手に前へ進むから、少しでも楽ちゃんになった。

といっても、つらくて痛いのは続く。そこに熱風のような苦い心地好さが加わるものだから、意識が朦朧としてきてまわりの様子も分からなくなって。馬が止まってからようやく、長い柵に囲われた広い土地に建てられた大きな家の前に着いたんだと知った。

そして、そのままぶっ倒れてしまった。

監禁と虐待

気がついたら、薄暗い場所に閉じ込められてた——というか。なんだよ、これ……?! 変なふうに身体を折り曲げられてて、ぴくりくらいしか動けない。落ち着いて(られるかよ)自分の身体が、どうされているかを確認めた。

まず、両足を投げ出した格好で地べたに尻を着けている。両足は広げて、重たい木の枷に嵌められている。枷には五つの穴が明いていて、足首を嵌められているのは外側の穴。内側の二つは少し小さくて、真ん中のは大きい。枷は重たくて、足を開いたまま膝を曲げるのは、おれの力では難しい。

両手は頭上へ引き上げられて、手首を重ねて縛られて吊るされている。すごい悪意を感じさせる監禁の仕方だ。

開かれた股ぐらは、乾いた血がこびりついてる。だけじゃなくて、地べたも赤黒く染まっている。

くそ……やつら、おれをどうするつもりなんだろう。恐怖と不安が、ようやく心を支配しかけたとき。

『気がついた?』

不意に声を掛けられて、ぎくつとなった。

『インディアンは野生の獣みたいに扱われるんだね。僕らは家畜と同じに扱われてるけど』

声の主は、おれより五つくらいはたくさん季節を巡ってるように見えるお兄さんだった。黒く見えるのは、部屋が暗いからじゃない。ほんとうに真っ黒。おれと同じで、真っ裸。なので、しゃべると口の中の赤とか歯の白さが眩しいくらい。なんだけど——おれより残酷な姿にされてる。両腕を伸ばして後ろで縛られて、手首を高く吊り上げられてる。立ってるんだけど、上体が直角の半分くらい前に倒れてて、腕は身体に直角。つまり、身体をこれ以上倒しても起こしても手首の位置が下がる。

立っているってのは訂正。つま先がちょっとだけ宙に浮いてる。つまり、吊るされてる。身体の重みは、ねじ上げられた両肩に掛かっている。

高い木の枝に腰掛けてて下りるとき、一瞬こういう形になることがあるけど、すぐ手を放さないと肩の関節を痛めてしまう。ずっと吊るされてるのは、ずいぶんつらいだろう。薄暗がりの中でも肌が黒光りして見えるのは、全身に滲んだ脂汗だ。平気そうな顔をしてるのは、痩せ我慢だろう。

『きみをこんな形に拘束したのはジェスだけど……やつに、その……姦られたのかい？』

なんとなく意味が分かったので、頷いた。

「あなたは誰？ おれはハゼツイイ」

おれらの言葉は通じないだろうと思うけど、話しかけられたんだから何か返さなくちゃ。

『ハゼ……？』

「ハゼツイイ。おれの名前だ。言いにくけりゃ、ビッチでもいいぜ。ジェスやダニーは、おれのことをそう呼んでるから」

『ビッチ？』

黒いお兄さんが不思議そうな顔をした——んだらう。薄暗いのと黒いのとで、よく分からない。

『おれは、ミック。濡れ衣。罪を、押しつけられて、懲罰を、食らっている、ところさ』
一語ずつ区切ってゆっくり話してくれるけど、名前がミックらしいと言う他は、ちっと

もわからない。のが、ミックにも分かったんだろう。黙り込んで、顔をそむけた。

それは彼の優しさだと思う。だって、おれ真っ裸だから、女をいたわる男なら見詰めたりはしないよな——そういうときの他は。

今になっておれが気づいたのか、さっきの動きで始まったのか、ミックの身体が、わずかに回っている。それまでは斜め左を向いていたのが、真正面になって。

「えっ……?!」

これも、ミックを吊るした人たちにされたんだろうか。下腹部が傷だらけで——男棒のくびれた所が紐で締めつけられて、紐に四角い石が吊るされている。男棒だけじゃない。玉袋の根元も同じようにされてる。

『アンナお嬢様に不埒な真似をした罰だとさ』

おれの視線に気づいて、ミックが吐き捨てるように言った。

『チンポを見せろって言ったのはアンナお嬢様なのによ。奥様が部屋に入って来るなり悲鳴を上げて、僕が悪戯を仕掛けたって、嘘の告げ口をなさったんだ』

「何を言ってるか分からないけど、きっと、ミックは悪くないんだろうな」

『ありがとう。同情してくれるんだね』

なんか、話を通じたみたいなお気分になった。のに満足したってわけじゃなくて。ミックはひどいことされてる男棒を、おれは血まみれの割れ目を、互いに曝してるんだ。世間話を（できないけど）する雰囲気じゃないよな。

男の人の（しかも、ひどいことをされてる）裸を見詰めるなんて、女の子のすることじゃない。ので、視線をそらせて、あちこちを眺めた。

ここは、いろんな道具類を仕舞っておく小屋らしい。先細りの鉄の板に長い柄が付いているのは、土を掘り起こす道具だろう。馬の背中に載せる座る台も、古ぼけたのが三つ。木で作った首のない木馬に載せてある。人が座れるくらいの浅い鉄の箱に円盤と取手が突き出ているのは、荷物を運ぶ橇だ。この円盤は中心に軸があって、くるくる回るようになっている。馬に頼まなければ運べない重い荷物も軽々と動かせる——と、白い人たちが働

いているところを近くで見た仲間が言った。同じやりかたで、四つの円盤が付いた小屋を馬に曳かせて移動するのは、おれも見たことがある。でも、平原の土の軟らかいところや、岩が多い場所では使い物にならない。

白い人たちは、何でも強引で力ずくだから、軟らかい所は石を敷き詰め、岩の多い場所では岩をどかす。そこに住んでる精霊には迷惑な話だ。その迷惑のとぼっちは、おれたちにも及ぶ。おれなんか、大災難だ。

——太陽が天の四半分くらいを動いた（んじゃないかと、あてずっぽう）頃、**ジェス**が一人でやって来た。

『これをやるぜ』

白い羽根を差し出した。そこらへんにうじゃうじゃいる鶯鳥の羽根だ。

『と言っても、自分じゃ付けられねえか』

おれの鉢巻に手を伸ばす。

「やめろ、羽根飾に触るな！」

これまでと同じで、おれの訴えを無視して、やりたいようにしやがる。羽根飾を取り上げて、赤い羽根に並べて白い羽根を刺して、針と糸で縫いつけた。

『よし。これで、おまえは俺の女になったぞ』

ひとつひとつの言葉は分からないのに、言っている意味は正確に分かった。こいつは、おれたちの掟を知っている。他部族の男に初めてを捧げた（奪われても）娘は、その部族になる。娘を取り返そうと二つの部族が争わないための知恵だ。

だけど、娘の側にだって好みがある。羽根を受け取って自分の手で羽根飾にするか。さもなければ……

「おれが欲しければ、おれと戦え！ 屈服するくらいなら、戦って死ぬ！」

男と戦って勝てる女はいない（餓鬼の喧嘩は別だ）。だから、女から戦いを挑むってことは、殺されたって靡くもんかという憎しみだ。そんな娘なんて滅多にいないから、それからどうなるかは知らない。男がわざと負けてやるのか、組み敷いてもう一回突っ込むのか。

ジェスは、せせら嗤っただけだった。

『この調子じゃ、もうちっと調教がいるな』

いきなり腹を蹴られた。

「ぐぶふっ……この手をほどけ。足を自由にしろ。おれと戦うのが、怖いのか！」

二発三発と蹴られる。手加減してるとは分かるけど……^{つが}番った娘にする仕打ちじゃねえぞ。

苦い汁が込み上げてきて、それを吐き出そうとして俯いたら、頭に鉢巻を巻かれた。娘になった^{しろし} 徴の赤い羽根と、女に^{しろし} された^{しろし} 徴の白い羽根とが付いた鉢巻を。

おれは、あらためて犯され辱しめられたんだ。

ジェスは、それ以上のひどいこと（今だって、じゅうぶんを十回重ねたくらいにひどいけど）はせずに、小屋から出て行った。

おれはジェスに初めてを無理矢理に奪われて、こうやって、あいつの女にされて——もう、仲間の所へは戻れない。でも、ジェスの妻になるのかっていうと、違うだろう。この黒いお兄さんは、おれたちと同じかそれ以上に、白い人たちから虐められている。おれも同じように扱われるのかな。

——だんだんと薄暗さが濃くなっていった。次に小屋の戸口が開いたときには、外も中と同じくらいに暗くなっていた。

四角い透明な箱に入れられた灯りに、男たちの姿が浮かび上がる。今度はジェスだけじゃなかった。ダニーもいたし、他にも五人くらい。

こいつらっていか白い人たちは、髪の毛の色がひとりずつ違ってる。金色っぽいことや茶色のや赤いのや——おれたちやミックみたいに黒いのは、この中にはいない。

いろんな髪をした連中で小屋が満杯になった。中の一人は、服装まで他と違っている。鏝の広い帽子をかぶっていないし、前が開いた上衣を着ていて、袴も細い。

そいつが、水の入った椀をおれの唇に触れさせた。

水の匂いを嗅いで、猛烈に喉がひりついた。太陽が天に達する前に捕まって、森の中で

の出来事は思い出したくもないけど、それから馬に引き回されて汗みずくになって、ここに閉じ込められてた——ずっと水を飲んでいない。

こいつが白い人たちの親玉らしいけど、敵からの施しだって、施しには違いない。

水を飲もうとして口を開けたら、椀が遠ざった。

『こっちが先だ』

親玉が袴をずり下げて下穿きの隙間から男棒をひり出した。手で握って、ふにゃんとした先っぽをおれの唇にぺちぺちと叩きつける。

何をさせるつもりかは分かる。でも、それって——何度も番ってから、生涯と一緒に暮らそうって心を決めてから、それでも求められて拒む女だっているんだぞ。それに、ジェスはどういうつもりなんだ？ 自分の女が目の前で辱しめられようとしてるんだぞ。平気……どころか、嗤ってやがる。

『ほれ。水が欲しければ、しゃぶれ』

だいぶん硬くなってきた男棒を、ますます唇に押しつけてくる。ここまで侮辱されたら、ちっちゃな女の子だって名誉を守ろうとするぞ。

おれは口を開けて——噛み付いてやった。

ぶにゅん……歯が押し返された感じ。最後の瞬間にひるんでしまった。噛み千切れなかった。

『アウチッ！』

ずるっと、歯の間で男棒が滑り抜けた。

親玉が両手で股ぐらを押さえて、おれを睨みつける。

『ビッチ！ この報いは受けさせてやるぞ』

へっぴり腰で怒鳴られたって、滑稽なだけだ。

『場所が場所だ。わしは医者へ行く。今夜は、おまえたちの好きにしろ。だが、わしが戻るまで、水一滴たりと与えるんじゃないぞ』

長ったらしい捨て台詞を残して逃げて行きやがった。けど、他のやつらは、そのまま残

ってる。森の中で、**ジェス**と**ダニー**がおれにしたことを思い出すと、まさかこれだけの人数でとは思うけど……

『おっ始める前に、調教をしておくぜ』

ジェスは、親玉の次に偉いのかな。他のやつらは、**ジェス**の言葉に逆らわない。**ジェス**の言いつけで、転がってた椀に水が入れ直された。

そいつを、おれの唇すれすれに近づけて。

『チンポをなめさせてください』

その言葉を何度か繰り返した。水が飲みたければ、そう言えってことだろう。だけど、敵が施してくれるってんなら受けてやってもいいけど、敵におねだりするってのは……いや、**ジェス**だけは……やっぱり敵だ。やつは、おれを組み敷いた気になってるかもしれないけど。おれは、やつに股を開いてやるつもりなんて、これっぽっちもないんだからな。

おれは、黙って**ジェス**を睨み続けた。根負けしたのは、やつのほうだった。また殴られるかなと怯えた（りするもんか）けど、何もされなかった。

ジェスの指図で、**ミック**を吊るしている縄が緩められた。**ジェス**に足を蹴られて、**ミック**は横向きになって地べたに座った。腕は肩の高さ。これなら、痛くないだろう。

ジェスが何か囁きながら、**ミック**の口に椀を近づけた。暗いからよく見えないけど、**ミック**の顔が怒りで歪んだようだった。だけど、おれを振り返って——目が合うと、ふっと表情が穏やかになった。

『チンポを、なめさせて、ください』

ゆっくりと、はっきりと、そう言った。

ジェスが袴をずり下げて、男棒を曝した。まるっきり縮かんでうなだれている——のを、**ミック**が顔を突き出して、ぱくんと啜えた。

ええええーっ？！

ミックは男だぞ。だけど——おれたちの中にも、男なのに女の役割を選ぶ人がいるって、話には聞いたことがあるけど。**ミック**は、それなのかな。なんてことよりも。

うわうわうわあ……だよ。男女が番つてるとこは、父ちゃんと母ちゃんのも、兄ちゃんディニスタオス・ダットオと煌めく朝露さんのも、他の恋人たちのも見てるけど、口に挿れるところを見るのは初めてだ。

ちゅばちゅばしゃぶって、ずぞぞーっと、すすって。ちょっと大きくなってきたら、あむあむと甘噛みして。もっと大きくなったら、れろれろと舌で先っぽを舐めたり。うわわわ……顔が腰になったみたいに、前後に激しく揺すり出した。

心臓が二十ばかり（今は速くなってるから、ふだんだと十ちよつとかな）拍つあいだ、それが続いて。

『オーケイ。そこまでだ』

ジェスが男棒を引き抜いた。まだ、大きくて反り返ったままだ。男棒をおっぼり出したまま、おれの前に立って、また腕を突き出す。ミックと同じことを言って、ミックと同じことをしろって意味だ。

絶対に、厭だ。だけど……ミックは、なぜ、ジェスの命令に従ったんだろう。最初は怒りを剥き出しにしてたのに。それに、わざとゆっくり一語ずつ発音した。おれに、お手本を示してくれたんだと思う。こうすれば虐められないで済むっていう。

ミックだって厭だったんだ。なのに、おれのために……男のくせに男棒をなめるなんて恥ずかしいことをしたんだ。俺が強情を張って、また虐められたら、ミックが悲しむだろうな。ミックは仲間じゃないけど、絶対に味方だ。味方を悲しませてはいけない。

おれは覚悟を決めた。口を開けて、ミックがしたように顔を前へ突き出して、ジェスの男棒を口に咥えた。ジェスは、おれの初めての男なんだし。他のやつのを咥えさせられるよりは、まだ我慢できる（かな……）。

うえ……?!

硬いくせに柔らかい。きゅろんとした舌触りだ。ちょっぴりしょっぱくて苦いかな。味は、それほど気にならない。でも、臭いがきつい。男の体臭といえば、そうなんだけど。

『咥えてるだけじゃ垢が明かねえぞ。舐めろ。唇でしごけ』

ミックと同じことをしろって言ってるんだろう。厭で厭で厭で……嘔みついてやりたいのを堪えて……おれは舌を動かした。ぺろぺろあむあむと、男棒を舐める。ミックがしていたみたいに、頭を前後に揺すって男棒を出し挿れする。

元から太くて硬かった男棒が、さらに太く硬くなった。

『よーし、いい娘だ。水を飲ませてやるぜ』

男棒から、生温かい水がほとぼした。

うわっ……ぷ！ これ、おしっこだ？！

あわてて頭を引いて、口の中の水を吐き出した。

「ぶへえ……ぺっ……」

ジェスも見ている連中も、げらげら嗤ってる。

『あーあ。せっかく水をやったのにな。ミスタ・セイバーの言いつけだから、もう飲ませてやれねえぞ』

ジェスが、見せびらかすようにして腕の水を飲みほした。それから、おれを見下ろして唇を歪めた。微笑のつもりだろうか。

『おまえは、おれの女だから、おれ以外の男に抱かれるのは厭だろうな？』

おれは、ジェスの顔を睨みつけた。分からなかった言葉の部分に、すごい悪意が感じられる。

『厭なら、こいつらは追っ払ってやるぜ。オーケイ？』

何かについて承諾を求められてる。承諾しようとしまいと、どうせ、力づくで思い通りにされるんだろうけど。それでも、おれにだって誇りはあるんだ。

おれがきっぱりと首を振ると、なぜかまわりの連中が囁し立てた。指笛を吹くやつもいた。

『そうだろうな。こいつは森の中でオナニーをしていて、俺たちが近づくのに気づかなかったくらいだ』

『ケツ穴にも挿れてくれって、自分からねだったんだぜ』

ジェスとダニーの言葉に、皆が笑い転げる。

『よーし。みんなで、おれの女を満足させてやってくれ』

ジェスの言葉で、ダニーを除く他のやつらがおれを取り囲んだ。四人だった。

虐められる。きっと、こいつらとも番わされる。そう覚悟（なんか、できない）したんだけど。手首を縛っている縄をほどいて、ごつい木の枷も外してくれた。

なんだ——と、安心するのは早すぎた。座った形のまま上体を前に倒され腕を後ろへ引っ張られて、木の枷の四つの穴に手首も足首も固定された。蛙が潰されたような形にされて抱え上げられ、大きな木箱に乘せられた。膝頭と肩が木箱の両縁に掛かって——くそ、女穴も尻穴も口も、宙に突き出てるじゃないか。

こいつらが何を企んでいるか分かったぞ。屈辱で胸がねじ切られそうになって、怒りで腸はらわたが煮え滾る。けど、何をされるか分かっているから、恐怖はあまり感じない。あんなに痛いのは厭だけど、恐怖と厭とは違う。

そんな考えは、こいつらが白い『人』だと勘違いしてたからだって、すぐに思い知らされた。こいつらは『人』じゃない。リガティ・ティンディ白い悪魔だった。

最初は、おれが予想していた『最悪』に収まった。

ひとりの男が、後ろから男棒を女穴に挿れてきやがった。こういう形は、人でも犬でも野牛でも見ているから、ちっとも驚かなかった。驚いたのは、覚悟していたよりも痛くなかったことのほうだ。痛いことは痛いけど、身体を真つぷたつに割られるような激痛ではなくて、歯を食い縛ってれば耐えられるくらいの——激痛の手前だった。

もひとりのやつが目の前に立って男棒で顔をはたきやがったときは、今度こそ嘔み千切ってやろうかと思ったけど。ミックが男の誇りを捨ててまで、おれをかばって『お手本』を示してくれた、その好意を裏切るような気がして——嘔まずに啞えてしまった。

こいつは、おれにしゃぶる暇も舐める裕りも与えてくれなかった。おれの頭を両手で抱え込んで動かさなくしておいて、女穴に出し挿れするみたいに、がしがし腰を打ちつけてきた。

「もぼおお……んっ、んっ、んっ……」

喉の奥まで男棒で突かれて、吐き気が込み上げてくる。針みたいに硬い剛毛が鼻の穴を突き刺して、くしゃみが出そうになる。そして、ジェスよりも臭い。おしっこの餿えた臭いにますます気分が悪くなる。

おれの後ろに取りついてるやつが、びくびくっと腰を痙攣させて。

『ふうう。人間の女に負けないくらい、気持ち良かったぜ』

満足そうに呟きながら、身を離れた。

『こっちは、奴隷ほどでもねえな』

おれの前をふさいでるやつが応じると、また嗤いが起きた。

『ブーブ婆は歯が抜けてっからな』

『噛まれないように気をつけろよ』

野次は、どうせおれの悪口だろう。

『るせえ。静かにしろ。気が散っていけねえ』

男はおれの頭をさらにのけ反らせると、上顎の裏に男棒の先っぽをこすりつけ始めた。そして、すぐに——男棒がびくびくって痙攣して。喉の奥に衝撃があった。嗅いだことのない臭いが鼻の奥に広がる。相反するあいはんような言い方だけど、気分が悪くなるような清々しい臭いだ。

「げほっ……」

おれが咳き込みかけると、素早く男棒が引き抜かれて、口を手でふさがれた。

『吐き出すんじゃねえぞ。飲めよ。喉が渴いてるんだろ』

おしっこみたいに口のなかにあふれてはいないけど、舌の奥にとろっとした感触がある。これを飲み込めって言ってる。

けど、喉に引っ掛かって飲み込めない。それに、これって子種だろ。身体の中に入れたら赤ちゃんが宿るかもしれない。

『飲めって言ってんだろ。おら……』

鼻をつままれた。息ができない。歯の裏側に舌を当てて唾を吸い出して——なんとか飲み下した。

男は手を放してくれたけど。それは、次の凌辱が始まる合図だった。

おれを犯した二人は小屋から出て行って、残るは**ジェス**と**ダニー**と、もう二人。その二人がおれの前後に取りついて、最初の二人と同じようにおれを犯した。おれの口にぶち撒けたやつは、やっぱり子種を吐き出すのを許してくれなかった。

そいつらも出て行って。**ジェス**と**ダニー**も、おれを犯すのかな。だけど、昼に子種を出しているから一日に二度は、若い番^{つがい}しかないから……おい、冗談じゃないぞ。

また四人が入って来た。さっきとは違う顔だ。そのうちの二人が、袴をずり下げて男棒を曝す。どっちも、すでに上向いてる。

『**ケツ穴も使ってやれよ。牝穴だけじゃ物足りないってよ**』

ジェスにけしかけられて。後ろにまわったやつが、尻穴に男棒を押し込もうとする。

「痛い！ そっちは厭だ！」

どこだって厭だけど、尻はものすごく痛いんだ。

「せめて、唾をつけるとか……ぎゃあああつ！」

喚いちまった。初めて姦^おられたときよりも痛い。ぎちぎちめりめりと、太い楔を打ち込まれてるみたいだ。

「ううう……ひどいよ。なんだって、こんなにおれを虐めるんだよお」

初めてを奪われたときだって相手を睨みつけてたのに、とうとう泣いちまった。

『**ぎゃあぎゃあうるせえ。これでもしゃぶってろ**』

口に男棒を突っ込まれて、声を封じられた。こいつも、やたらと突き挿れてくる。

なんで、おれ（というか、**インディアン**）を虐めるか、^{リガティ・ティンディ}白人にも言い分はあるだろう。おれたちが、白人の作った柵を壊したり、牛を狩ったりするからだ。だけど、精霊の許しも得ず、先に住んでるおれたちに相談もせず、勝手に土地を囲って自分たちの物だと言って言うんだし、草原をうろついてる牛は見つけた者の獲物なんだぞ。

もつとも。おれのこの災難については——おれが若い女で、こいつらが凶悪な男だっ
てのが、一番の理由かもしれない。でも、他部族のやつらだって、一人の女を何人もで犯し
たり、裸にして縛って閉じ込めて水も飲ませないなんて、虐待はしないぞ。

激痛に喚きながらも、悔しくて悔しくて悔しくて、怒りが募ってくる。涙が止まらない。

ジェスが横に来た。

『虐めてばかりじゃかわいそうだ。可愛がってやる。なんたって、おれはおまえのハズバ
ンド・アウトローだからよ』

これまでのより陽気な笑い声が湧いた。

ジェスは、おれの下腹部に手を差し入れて……

「ひゃうんっ……?!」

また、あの感覚に襲われた。熱い風。それとも、風と雲を切り裂く鋭い稲妻。尻穴の激
痛にのたうっていたところにそれを撃ち込まれて、わけが分からなくなった。

「い、いい……もっと強く……もっとたくさん……」

痛いのを忘れたくて、稲妻にすがりつきたくて、口走っちゃった。他の男とは違う。お
れの最初の男なんだ。すこしくらいは甘えたっていいだろ。

ジェスはおれの願いに応えてくれた。メシベを強くつまんで引っ張ったり、先っぽをこ
すったり。木の精霊と戯れてるときに自分でこんな乱暴をしたら痛いだけで、ふんわか気
分なんか消し飛ぶだろうけど。激痛を和らげるには、これでも全然足りない。おれは力を
抜いて、男棒が尻穴に出挿りする動きに逆らわないようにした。そうすると腰が揺れて、
尻穴の痛みが増すけれど、その何倍もメシベが……凄い。気持ち好いのとは違う。とにか
く、凄い。けど、激痛も続いているから、身体が宙に浮いたり膨れたりはいらない。

もどかしい。もどかしいのが、延々と続いて。なにか形のない叫びが身体の裡に貯まっ
てきた——ところで、尻穴から男棒が抜かれた。ほとんど同時に、ジェスの手も引っ込め
られた。

まったく別の意味で、宙に放り出された気分。

だけど、これで終わったらいい。四人が出て行っても、誰も入って来ない。

『だいぶん、かばがばになっちまったろうな』

『それじゃ、あれをやってみるか？』

『殺しちゃったら、今度は誡首くらいじゃ済まねえぞ。ミスタ・セイバーはビッチを直々に罰するつもりでいるからな』

ジェスとダニーが、おれを横目に見ながら——どうせ、おれを虐める相談だろう。いや、違うみたいだ。腕を吊ったまま座らせているミックの縄をほどいた。ミックが、男棒に巻かれた紐をほどきに掛かっても咎めない。ミックは腕が痺れてて、紐の端をつまむのも四苦八苦してる。

二人はミックをほったらかして、おれの枷を外してくれた。でも、すぐに縄で後ろ手に縛った。おれを立たせて、輪になった縄を首に掛けた。

知ってるぞ。もう八つほども季節が巡ったけど、木から吊るされてる仲間の死体だって見てる。草原で群からはぐれてる牛を捕まえたら、泥棒だって難癖をつけられて殺されたんだ。大人たちは白人と争ったけど、その頃はおれたちには弓矢しかなかったから、火を噴く棒で戦士ばかりか女子供老人まで何十人と殺された。おれたちも仕返しはしたけど、頭数じゃ六人につき一人の割合だったと聞いている。結局、おれたちが森の向こう側へ移住することで和平を結んだ。その森まで、柵で囲みやがって——なんて、昔のことを憤ってるどころじゃない。

縄が投げ上げられて、屋根の下を通っている横木に掛けられた。

こいつら、おれを縛り首にするつもりだ。だらしのないことに、おれはうろたえるばかり。縛られて、ごつい男二人に挟まれて、逃げられない。だけど、通じない言葉で命乞いをするなんて無様な真似はしないぞ。

あれ……様子が違ってきた？

縄が引かれたけど、おれがつま先立ちになったところで、縄尻は出入口の戸を支えている金具に結びつけられた。ジェスが、おれを後ろから抱え込んで——尻穴に男棒を突っ込

もうとする。おれを殺すつもりはないらしい。

男棒が尻穴に押しつけられたけど、ぐいぐい押されるだけで、ちっとも挿入^はってくる感じがなかった。

『ちっ。角度が合わねえ』

張られていた縄が緩められ、おれは膝立ちにされて肩を地面に押さえ込まれた。この形だと、簡単に尻穴へ男棒を突っ込める。前の男に犯された子種とかおれの血でぬるぬるになっているから、あんまり痛くなかった。

ジェスがおれを羽交い絞めにして立たせ、ダニーがまた縄を金具に結びつけた。そして、尻穴を貫かれて立たされているおれの正面から、女穴に男棒を嵌めた。

女穴も尻穴も、ぎちぎちに痛い。腹の中で二本の男棒がせめぎ合ってる。

ジェスがおれを上下に揺さぶり始めた。ダニーがその動きに合わせて腰を動かす。

痛くなんかないぞ。前後を同時に搔き回されて、気持ち悪いだけだ。

『どうにも具合が良くねえな』

ジェスが、おれの腋の下から腕を抜いた。

『ミック。その斜めになっている縄を下へ引っ張れ』

小屋の隅にうずくまって壁と睨めっこをしていたミックが、驚いたように顔を上げた。

『聞こえなかったのか。縄を引っ張って、このインディアンを吊るせ』

ミックが膝立ちになって、両手を胸の前で組み合わせた。

『そんなことをしたら、この娘が死にます。僕にはできません』

『じゃあ、仕方ねえな。マックとヒップを呼ぼう。二人にやらせる』

『……………』

『三人まとめて撃ち殺されたいのかッ！』

『なに、殺しはしない。首を締めたら穴も締まるっていうからな。ちょっと試すだけだ』

ジェスが荒い声で叱りつけて、ダニーがなだめる。

『ほんとうに……この娘を殺さないんですね？』

『さっきの話を聞いてただろ。このビッチを殺したらミスタ・セイバーにどやされる』

三人が話しているのは、やっぱりおれのことだったと分かった。

ミックが立ち上がって、斜めに張られている縄に手を掛けた。まるで子供のそれみたいに、男棒が縮かんでいる。ミックがおれを見た。すごく悲しそうな眼をしている。

『ごめん。親まで巻き込みたくないんだ』

ミックが、ためらいがちに縄を押し下げた。同時に、ジェスがおれの腰をつかんで持ち上げる。つま先が地面から離れた。

「ぐふっ……」

ジェスが手を放すと、首の縄が締まって——息ができなくなった。

ジェスとダニーが、腰を上下に動かす。

『もっと引っ張れ』

さらに縄が締まって——目の前が赤く染まってくる。

「かはっ……」

わずかに息を吐き出せるけど、まったく吸えない。赤い視界の中で黒い星が飛び交い、だんだん数が増えてくる。足が何かに当たる。たぶん、勝手にじたばたして、二人を蹴つてるんだ。

『くうう。きついぜ。けど、きつけりゃ良いってもんでもねえな』

『ミック。勝手に緩めるんじゃないぞ』

苦しい……全身が痙攣してるのが、自分で分かる。くそお……おれは、こいつらに殺されるんだ。不名誉きわまりない、恥辱の死だ。赤い闇が黒い星で埋め尽くされて……

どさっと、地べたに投げ出される痛みを感じた。けほけほと激しく咳き込みながら、息を食った。

尻が冷たい。濡れてる。腹が軽くなってる。男棒が抜かれたせいだけではなくて……おしっこを漏らしたらしい。この冷たいのは、それだ。

ジェスとダニーのどっちか分からないけど、髪の毛をつかんで、おれを引き起こした。

後ろ手に縛られている縄がほどかれて……くそ、安心して損した。また、ごつい木枷を嵌められた。今度は、五つの穴を全部使いやがる。首を真ん中の大きな穴に入れられて、両側の小さな穴には腕を、外側の穴には足首を入れられた。手足を動かそうとすると、枷の重みが加わって肌が擦れる。両脚は大きく開かれて——きつと、割れ目の奥まで丸見えにされてる。開いた腕に頭の後ろを通して何かの道具の柄が渡されて、そこに手首を縛られた。その縄がさっきの横木に結びつけられて、おれは尻だけを地べたに着けて座った形にされた。

『それじゃ、ゆっくり休めよ。明日のミスタ・セイバーの懲罰を楽しみにしてな』

ミックを追い立てて、ジェストとダニーが小屋から出て行った。

曇っているんだろう、月明かりもない暗闇。朝まで、このまま放つとかれるんだろうな。そして朝になったら……また虐められるんだろうか。首を絞められるのは厭だけど。三つの穴に男棒を突っ込まれるくらいなら我慢するから、せめて水を飲ませてくれ……くそ、なに卑屈なこと考えてるんだ。おれたちズンナックは誇り高き部族だ。困ってる者がいたら、他部族の人にだって見返りを求めずに施す。いくら自分が窮地に陥ったからって、身体を与えて助けを求める女なんて、ひとりもないんだぞ。

せめて、月の光が窓から影を落としてくれないかな。そうしたら、夜明けが近づくのが分かるのに。でも、分かったところで——虐められるときが近づくだけか。

気を張っているつもりでも、ほんとは魂が砕け散る寸前まで打ちのめされていたんだろう。何も考えられなくなって……身体感覚も薄れていった。

銃殺と縛首

身体を揺すぶられて、おれは目を覚ました。目の前にミックの顔があった。ちゃんと（ぼろっちいけど）服を着ている。

ジェスたちの姿は——と、あたりを見回したけど、誰もいなかった。と思うけど、まだ夜が明けきっていないんだろう。閉じ込められたときよりも、もっと薄暗い。

『これを、飲め』

水を容れた椀を、ミックが口に近づけた。

『昨夜は、ごめん。親まで殺すと、言われたら、逆らえなかった。きみを、殺さないという、言葉を、信じるしかなかった』

不思議だ。ひとつずつの言葉は分からないのに、ミックの言いたいことは何となくわかる。味方だからだろうか。

『おまえ、わるい、ない。ジェス、わるい』

けっして恨んでないって伝えたくて、聞き覚えたばかりの言葉を、なんとか並べてみた。

『水を、飲め。僕には、これくらいしか、してあげられない』

「ありがとう」

自分では飲めないなので、口を開けた。ミックが椀を口にあげておおうとしてくれるけど、椀につかえてしまう。無理に椀を傾けると水がこぼれてしまう。

ミックが首をかしげて。

『いやらしい、気持ちじゃない。こうしないと、飲ませられない』

ミックが水を口にふくんで顔を近づけた。

うわ、接吻だ。なんてうろたえかけて、もうすこしで笑うところだった。接吻より何百倍も淫らなことを、さんざんされてるんだものな。

おれは（首枷が痛いけど）頷いて顔を上向けて——接吻にふさわしく、わずかに唇を開いた。ミックが横ざまに唇を重ねてきて。

口の中に流し込まれた水は、山羊の乳よりも苺よりも甘かった。真夏の水浴びよりも冷たく心地好かった。ごくごくごとと、一滴ごとに喉が鳴る。

ミックは何度も接吻をしてくれて、あっという間に椀が空になった。

生まれて初めてって思うくらいに、幸せな気分になった。もしかしたら、水のせいだけ

じゃないかもしれない。

ばあん。

扉が蹴り開けられて、幸せな気分は一瞬で恐怖に変わった。見知らぬ（どうせ、昨夜におれを虐めたやつのひとりだ）男が近づいて来て——ミックを蹴り飛ばした。ミックはわずかに身を護る動きをただけで、抵抗もせず地面に転がった。

『おおい、ジェス！ 来てくれ！』

そいつが呼ばわると、待ち構えていたみたいに、ジェスともうひとりの男が駆けつけた。

『この餓鬼。ミスタ・セイバーの言いつけを破ってビッチに水を飲ませてたぜ』

ジェスが、おれとミックを交互に睨みつける。なぜか薄嗤いを浮かべてる。

『こいつも素っ裸にして、ビッチと並べておけ。痛めつけなくていいぞ。活きのいいほうがミスタ・セイバーのお気に召すだろうからな』

ミックもたちまち服を脱がされる。手足を背中までひとまとめにされて縛られ、屋根下の横木から俯せに吊るされた。

『こいつら、キスをしてやがったぜ』

『けっ。アンナお嬢様の件といい、色気づきやがって。それじゃ、同じように懲らしめてやるか』

ジェスが手下（だと思ふ）に指図して、ミックの男棒と玉袋をひとまとめに縄で括らせた。横長の箱から角が突き出たような鉄の塊が、そこに吊るされる。ミックの顔が苦痛に歪んだ。

背中をうんと反らせて吊るされるだけでも、ずいぶんきついだろう。そこに鉄の重みが加わっただけじゃない。玉袋が引き伸ばされて、縄から先はぱんぱんに膨らんでる。おれは男じゃないから、それがどれくらい痛いかは分からないけど。すぐに脂汗が滲み出るくらいだから、もしかしたら、尻穴を男棒に抉られるよりもつらいんじゃないだろうか。

『おまえには水を飲ませるなど言われているからな』

ジェスがおれの斜め前に立って、片足を腹に当てた。その足が後ろへ引かれて。

「ぐぶふっ……！」

靴のつま先を腹に蹴り入れられた。内臓が口から飛び出そうな激痛。二発三発と蹴り込まれて——せっかく飲ませてもらった水を吐き出しちまった。だけでは足りずに、腹の中の苦い水まで、口からあふれた。

『なんだ、その目つきは。水を飲ましてほしければ、どう言えればいいか、教えてやっただろ。言ってみな。チンポをなめさせてくださいって』

言うもんか。その言葉が水を求める意味じゃないってことくらい、もう分かってるんだ。おれはジェスを睨みつけてやった——つもりだけど。こいつに二本目の羽根をもらった(押しつけられた)んだと思っちゃまって。すぐに目を伏せてしまった。

『けっ。揃いもそろって、強情な餓鬼どもだ。ミスタ・セイバーにたっぷり懲らしめてもらうがいいぜ』

おれとミックを閉じ込めて、三人の白人どもは小屋から出て行った。

『かえって、ひどい目に遭わせちまったな。ごめんよ』

ミックが謝っているのが分かった。

『ミック、わるい、ない。みず、よかった。ありがとう』

ミックが小さく頭を動かした。おれの言葉がちゃんと通じて、頷いてくれたんだろう。

『僕は奴隷の子供として生まれた。一人前になったけど、できるだけ仕事が出来ないふりをしてるんだ。僕が使えるって分かったら、僕か両親か、どちらかが売られるかもしれない』

これまでと違って、自分に話しかけているみたいな口調だった。

『そうになったら、妹のティティがどんな目に遭わされるか。今だって、旦那様の慰み物にされてるんだ』

ダンナサマってのはミスタ・セイバーのことらしいと見当がついた。だけど、ミックが口を閉ざしてしまったので、それ以上は分からなかった。

吊るされていて苦しいんだろう。全身が油汗でぬらぬら光っている。それが、地肌の黒

に映えて——こんなことを思っちゃいけないんだろうけど、美しい。

『ビッチ、ズンナックのなかま。つかまる、ひどいこと、されるした。ミックも、ひどいこと、されるのだな』

『きみのほうが、もっと、ひどいことを、されている。きみは……ティティと同じ女だから』

ティティてのは、ミックの家族。妹かな。おれもティティも女だ。ミックは、それを言ってる。

『ビッチ、ええと……』

季節が何回巡ったかなんて、白人の言葉では言えない。代わりに、指を一本ずつ折って、全部折り終わったら開いて、また片手だけ折った。

ミックが頷いた。それから、ゆっくりと、縛られている手を動かして、閉じて開いて、片手ともう一本だけを折った。へえ、おれとひと巡りしか違わないのか。

でも、そうすると。ティティはおれよりも後に生まれてる。それなのに、とっくに番わされてるんだ。きっと、おれと同じで無理矢理なんだろうな。それとも。ミックが白人どもの言いつけに従っているのと同じで、おれみたいに縛られなくても、股を開いてるんだろうか。それをミックに尋ねるのは、気の毒な気がする。

しばらくは、どちらからも言葉を発さなかった。おれはともかく、ミックはのんびり世間話なんかしてられない。全身汗まみれで、地面に滴ってる。

もっとも、おれだって。その汗を舐めたいって本気で思うくらいに喉が渴いてる。声が掠れてるのが自分で分かる。

それでも。思い出したように、かわりばんこに、ほとんど独り言で、身の上話をぼつぼつ。これからどうなるかなんて、考えたくもないし——なにか楽しいことを語らうなんて雰囲気でもない。

ミックは白人の仲間じゃなくて、白人にこき使われて、殺そうが犯そうが奪おうが、すべて持ち主の勝手なんだそうだ。誰かの持物としてこき使われるってところを除けば、おれ

たちインディアンも白人から見れば同じかもしれない。

——ミックは苦痛に、おれは飢えと渇きに苦しめられながら、外はどんどん明るくなって、そろそろ太陽が天に達するんじゃないかって頃になって、ミスタ・セイバーが戻って来た。

『インディアンは射ち殺す。主人に逆らう奴隷は縛り首が掟だ』

おれとミックに順番に指を突きつけて、宣告した——んだろう。

おれもミックも後ろ手に縛り直されて、素っ裸のまま外へ引き出された。

昨夜の男たちだけでなく、その倍を超える人が集まっていた。黒い人たちは、ミックの仲間だろう。もし赤ん坊を抱いてたら子供か孫か尋ねないと分からないくらい男の人と女の人。もっと若い夫婦——と分かるのは、二人がより添ってるから。もしかして、ミックの両親だろうか。子供が一人前になる頃合いの男が二人。おれより若い感じの娘が、ミックの妹のティティだろう。それから、白い子供たちが、男三人と女二人。ミスタ・セイバーのすぐ後ろに、ジェスよりも季節を十幾つは巡っていきそうな男。ミスタ・セイバーの女房らしい女は見当たらない。

男たちが子供も含めて、おれをじろじろ眺めてるのは——きっと、裸の白人女がおれたちの集落に紛れ込んできても同じかなと思うけど。女も平気な顔して、まあ、どちらかという、おれではなくミックを眺めてるのは、おれには理解できない。

おれはミックから引き離されて、草も生えていない地面を柵で囲った場所へ連れて行かれた。柵の出入口は高い二本の柱で、いちばん上には頑丈そうな横木が渡されている。いったん後ろ手の縄をとかれて、両手を広げた形で横木から吊るされた。両足にも縄を巻かれて左右に広げられ、二本の柱につながれた。さんざんひどいことをされてきたから、これくらいで羞ずかしがってられない。

ミスタ・セイバーが、ぴかぴか光ってる鉄の器と刷毛を持っておれの前に立った。器の中には黒い染料が入っている。おれたちが化粧に使う染料よりも、粘っこいみたいだ。ミスタ・セイバーが刷毛を使って、おれの身体に模様を画いた。臍のまわりに円を描いて、

割れ目を塗りつぶすように、ここには大きなバツテン。顔にも乳房にも模様は描かなかった。

下手くそな化粧が終わると、ミスタ・セイバーは引き下がって、代わりに三人の男の子が、二十歩くらいを隔てて横に並んだ。男の子と言ったけど、いちばん季節を巡ってそうなやつは、おれよりも大きい。

ミスタ・セイバーが、そいつらに火を噴く短い棒をひとつずつ手渡した。

『銃を人に向けたら、ためらわずに引鉄を引け。今日は、その訓練だ。あのインディアン娘を射ち殺せ』

男の子たちが、顔を見合わせた。

『でも、パパ。人を殺すのは良くないことだよ』

大きい子というか青年が、ミスタ・セイバーに何か言い返した。

『インディアンは人間ではない。野生の害獣だ。わしらの生活を脅かす侵す害獣は、駆除せねばならん』

『わかった。それじゃ、僕からやるよ。長男だからね』

『偉いぞ、ボビー』

ボビーてのが名前だろう。そいつが向き直って、火を噴く棒をおれに向けた。

そうなって、やっと。おれは射ち殺されようとしてるんだと理解した。人間が人間を、それも盗みも殺しもしていない、掟を守って生きている人間を殺すだなんて、信じられない。なにも考えられなくなって、それでもおれは喚いていた。

「やめろ。殺すな。降参する！」

部族同士の戦争だって、降参した人間を殺したりはしない。捕虜にして辱めるとかはするけど。

なのにボビーは、構えた棒を下ろそうとはしない。棒を握った右手に左手を添えて、片目をつぶって……

「やめろ。殺すな！」

ばん！

ちゅいんと、おれの身体のすぐそばを鋭く短い音が奔り抜けた。

『両目を開けて狙え。足を踏ん張って、逆に肩の力を抜け。こうだ……』

ミスタ・セイバーがおれに棒を向けると、片手のままで。

ばあん！

ぱしっと頭のすぐ上で小さな音がして、白い羽毛が飛び散った。ジェスに押しつけられた羽根が砕けたんだろう。殺される間際になって、忌まわしい縁が切れたってわけだ。

『おまえは、羽根なんか狙うんじゃないぞ。わしの描いた的を狙え』

『分かってるよ』

ボビーが、また棒を構えた。今度は両目を開けて、ずっと安定した姿勢だ。

もう助からないなど、おれは観念した。せめて、ズンナックの名を辱めないように、取り乱したりせず立派に死んでやろう。

ばん！

びしっと、腹に鋭い衝撃が走った。

「ぐっ……」

拳骨で殴られるのとはまったく違う、鋭い痛みだった。硬い団栗が腹を突き破ったんだろう。でも、団栗は小さいから、心臓にでも当たらないかぎりには、すぐには死なないらしい。

『お兄ちゃん、さすがだね。次は僕だぞ』

季節の巡りはおれと同じくらいの子が、おれに棒を向けた。

ばん！

今度は乳房の上あたりに鋭い痛みが奔った。

それでも、おれはまだ生きていた。

そうだ。おれが縛りつけられているのは木の柱だ。^{チジッディ・アブレ}木の精霊が護ってくれているのかもしれない。そうだとしたら、あの遊びは後ろめたいことじゃなかったんだ。

いちばん小さな子がおれに棒を向けたとき、おれはその確信を叫んでいた。

「おれを護ってくれよ、チジッディ・アブレ！」

祈りは通じた。最初の二発は狙いが逸れて。十歩近づいてから射った三発目は、バツェンの真ん中に命中したけど、ただ痛いだけだった。臍の上と乳房の下と割れ目のすぐ上を団栗が貫いたはずなのに、おれは一滴も血を流していなかった。奇跡だ。精霊の加護だ。

けれど、感謝の祈りを捧げている暇もなかった。

『面白い遊びですね。俺たちも遊んでいいですかい？』

昨夜の男どものひとりが、何かをミスタ・セイバーに話しかけると、彼は一瞬考え込んでから頷いた。

『いいだろう。だが、残弾を射ち尽くしたら終わりだぞ。ミックの処刑が残っておる』

その男と他の二人が、子供たちから火を噴く短い棒を受け取った。そして、小さな子が射った位置に立って、おれに棒を向けた。

大人の腕前じゃ、はずしっこない。それに、三人一緒に射つつもりらしい。精霊の加護が続いてくれればいいんだけどな。

三人がなにか話し合ってから。

ぱぱ、ぱん！

一斉におれを射った。

びびびびしと——左右の乳房と割れ目の上に激痛が走った。

「きゃああああっ……！」

乳房もすごく痛かったけど、メシベは激痛なんてものじゃない。指で弄ばれるときとはまったく違う意味で、腰が砕け散ったような衝撃だった。

だけど、悲鳴を上げたってことは、死の真っ黒な恐怖が薄れたからかもしれない。まだ、精霊の加護は続いている。

三人が他のやつと交替して。今度は臍の下ばかりに三発が当たった。鋭い痛みだけど、殺される恐怖が薄れると——拳骨よりはましなように思えてきた。

この二回で、棒のひとつから団栗が尽きて。次にもうひとつも射ち尽くされた。最後のひとつは、**ジェス**の手に渡った。

『**ミスタ・セイバー**も強欲だぜ。ティティだけじゃ満足できずに、おまえまで独り占めしようってんだからな。これはおれからの餞別だぜ』

ジェスは棒を女穴に捻じ込んだ。細いくせに、先っぽに棘が突き出ているから、男棒より痛いくらいだ。

間近に見下ろすと、棒の作りがよく分かった。団栗を入れておく穴の明いた丸い筒と、団栗を叩いて破裂させる鈎と、指で引いて鈎を動かす突起。その突起を握る指に力がこもって。

ばん！

「ぎゃはああっ……！」

最初に男棒に貫かれたときよりも、ずっと熱くて太い激痛が割れ目全体を引き裂いた。

ジェスが棒を引き抜くと、まるで初めてのときみたいに血が滴った。激痛が治まらない。

『よーし。これで、**インディアン**娘の処刑は終わりだ。次は**ミック**だ』

おれは宙吊りから下ろされて。手だけを前で縛られた。これまでよりも、ずっと緩い扱いだった。

ミックが連れて来られて、おれが吊るされていた横木の下に立たされた。

『旦那様、お赦してください。天国に召されるのは厭です。これからは、**モック**や**ムック**よりもたくさん働きます。鞭百回でも一週間の絶食でも、どんな罰でも受けます。どうか、命だけはお救けください』

縛られた身体で膝を突いて、**ミスタ・セイバー**に命乞い（だよな）をする**ミック**。すぐにでも戦士になれる体格と季節を経ているくせに——昨日までの俺だったら、軽蔑していただろう。でも、今はできない。殺されると分かったときの恐怖を、おれも味わったから。だけじゃない。**ミック**は、死ぬのが怖くて跪いてるんじゃないのだろう。自分がいなくなったら、妹が**ミスタ・セイバー**に今よりも虐められると思って、だから命乞いをしてる。

家族のために誇りを棄てる者を、おれたちは卑怯者とは呼ばない。

でも、ミスタ・セイバーにはドレイの誇りなど何の値打もないんだろう。ミックの首に縄が巻かれて、その縄が横木に掛けられた。ジェスの手下が、三人掛りで縄を引っ張って——ミックの身体が宙に浮いた。

首を絞められて声が出せなくなったミックは、ただ足でじたばた宙を蹴るばかり。

『どうした。救けてやらんのか？』

不意に、おれは突き飛ばされた。転びかけたのは、足を踏ん張って体勢を立て直す。

行け——というふうに、ミスタ・セイバーが顎をしゃくった。

信じられない。この男は、おれがミックを救けてもかまわないと言っているらしい。

おれはミスタ・セイバーを睨んで、それからミックを振り返って。一目散に駆け寄った。けれど、ミックを吊るした縄は、柱の高い位置に結ばれていて、おれが手を伸ばしても届くかどうか。なのに、おれは両手を縛られている。

おれがうろたえるのを見て嗤うつもりか。だけど、ミスタ・セイバーもジェスも、他の男たちも——だけじゃなく女の子まで、おれを見詰めている。おれがどうやってミックを救けるか、興味津々ってとこか。

だけど、ドレイの仲間は——悔しそうな顔で俯いてる。いや、ひとりだけ、ミックのお母さんは、ミスタ・セイバーの足元にうずくまって、きっと、息子を赦してくださいって、お願いしてるんだろう。

その姿を目にしたとたんに、閃いた。

おれはミックの下に身を投げ出して、四つん這いになった。ミックの足が、おれの背中を踏んだ。

良かった。これで、ミックがすぐに殺される恐怖ではなくなった。

『ありがとう。どんなに感謝しても足りない』

ミックが掠れた声でお礼を言ってくれた。

『ミック、みず、くれた。ビッチ、ミック、たすける』

裕りのある者が困っている者に施す。当たり前のことだ。おれが水に渴いていたときは、ミックが救ってくれた。今はミックの命が危うい。おれが救ける番だ。

だけど……いつまで、こうやってれば、いいんだろう。そんな不安が、たちまち恐慌に変わった。ミスタ・セイバーが何か言うと、みんながおれたちに背を向けて、去り始めたんだ。ドレイの人たちは、跪いて手を胸の前で組んで、ミスタ・セイバーを見上げて懇願してたけど、ジェスたちに殴られて追い払われた。

じりじりと影が動く。おれたちの目の前では、白人たちのふだんの暮らしが営まれてる。ドレイの女たちは、洗濯をしたり家の周りを掃除したり。ドレイの男たちは、荷物を運んだり薪を割ったり。ちらちらとこちらを盗み見てるけど、そんなところを白人に見つかったら殴られる（か、もっとひどいことをされる）んだろう、すぐにそっぽを向いて、それまでの仕事を続ける。

白人の男は大半が馬に乗って出掛けた。歩けば太陽が天の四半分を動くくらいはかかる街へ行ったのか、草原に散らばっている牛を集めに行ったのか。ミスタ・セイバーの家族は、大きな家から出て来ない。ときおり、窓からこちらを眺めている姿が見えるときもある。

ふだんのおれなら、四つん這いで人を背中に乗せるくらいへっちゃらだけど。もう、丸一日以上、水を飲んでいない。飯も食っていない。女穴の中で火を噴く棒を破裂させられて、きっとひどく傷ついてるんだろう。ずきずき疼いてるし、血も止まらない。太腿が赤く染まって、地面には血溜りまでできている。今にもぶっ倒れそうだ。

でも、倒れたら——ミックが死んでしまう。

「くそお……」

おれは声に出して、四肢を突っ張った。

最初のうちは、背中の上でミックがもぞもぞ動いていたけど。

『くそ、駄目だ。どうやっても、ほどけない』

そう呟いたのを最後に、動きを止めた。

太陽が傾いてくるにつれて、おれだけが先に日が暮れてくみたいに、目の前が薄暗くなってきた。地面が揺れ出した。

——足音が聞こえて頭を上げると、**ミスタ・セイバー**と**ジェス**の姿が見えた。すぐ後ろに**ダニー**じゃない男が二人、続いている。**ジェス**は、馬の背中に乗せる座る台を抱えている。

『つらそうだな』

ミスタ・セイバーが片足を上げて、おれの乳房を下からこねくった。それくらい、痛くも羞ずかしくもないぞ。

『すこしは楽にしてやろう』

ミスタ・セイバーが、柱につながれている縄を引いた。おれの背中から、**ミック**の重みが失せた。

『かはっ……』

ミックが短く呻いて——振り返ったら、宙で足をじたばた蹴っている。

『やめる。ミック、おろすしろ』

『へえ。ちったあ言葉を覚えたか。安心しな。すぐ下ろしてやる』

ジェスが、持っていた座る台をおれの背中に乗せた。革と薄い鉄だけで作られているにしては、すごく重たい。しかも、座る台に付いている金具に、後ろの二人が角のある四角い鉄の塊を、左右にひとつずつ結びつけた。

「ぐ……」

まるで**ミック**を乗せたくらいに重たい。そこに、ずしっと重みが倍になった。

「くうっ……」

堪えきれずに、肘が折れ曲がってつんのめった。**ミック**が足を宙で蹴る気配が、はっきりと分かった。

「くそお……！」

おれは渾身の力を振り絞って、四つん這いの形に戻った。ミックの足が座る台を蹴って、じきに座る台に掛かる重みが倍になった。

ふう……と、気を抜くこともできない。全身全霊で突っ張っていないと、また潰れてしまう。まるで生まれたての仔馬のように、手足が震える。仔馬は、すぐにしゃんと立つけど、おれは震えがひどくなる一方だ。

百を十回は数えられるくらい、白人どもはおれとミックが苦しむのを見物していたけど、それも飽きたんだろう。引き揚げて行った。

また、おれとミックだけが、のどかな光景の中にぽつんと取り残された。のどかな光景の中に吹き荒れている嵐。

ただ重みに耐えようとしていると、ますます重みがのし掛かってくる。ので、ミックに話しかけた。

『チョウバツ、いつも、あるか?』

『鞭打ちや食事抜きは、しょっちゅう。男女にかかわらず、チンポや牝穴、それとケツ穴への仕置……ていうより遊び半分かな、珍しいことじゃない。射たれても死なないピストルとか、こんな縛首は、初めてだけだ』

うんざりしてるってことが、よく分かった。殺される心配は、あまりしていないのかな。

だけど、ちっとも助かったわけじゃない。おれ、もうこれ以上は支えきれないぞ。

『旦那様らしい懲罰だよな。奴隷は牛と違って、肉は食えないし革も剥げない。その代わり、売れば牛よりも儲かるってのが、口癖だ。滅多なことじゃ、殺さないのさ』

もう少しだけは、死に物狂いで頑張るけど。そうしたら、きっと……じゃなくて、たぶんかな。いや、もしかしたら、だ。もしかしたら、ミスタ・セイバーが実は慈悲深くて、すぐにでも戻って来てくれて、赦してくれるかもしれない。でも、殺すも犯すも奪うも自由だってことは——くそ、あいつが慈悲深くなんか、あるもんか。でも、ジェスなら……駄目さ。女穴の中で火を噴く棒を射ったんだぞ。だいいち、やつがくれた白い羽根は碎け散ってる。おれは、それだけは喜んでるんだもんな。

ジェスのことを考えたとき、がくと前につんのめった。また、渾身の力で四つん這いに戻した。

そんなことを何度も繰り返した。もう、絶対に無理だと思いながら、渾身の力——が尽きたら死力を振り絞って。

ついに太陽が地平線に触れて、じきに没した。

でも、まだ誰も助けに来てくれない。

『日が、沈んだ』

ミックが、ぽつんと呟いた。

『……こうなると、朝まで、赦してもらえない。もう、諦めた。僕が、いなくなってティティが、ひどい目に逢わされても、それは、天国に召されるまでの、短い間だけのことだ』

これまでは、彼の言葉だけはなんとなく分かっていたのに、今はまったく分からない。ただ、深い悲しみだけが伝わってくる。

『きみは、逃げろ。追手が、掛かるのは、朝に、なってからだ。それまでには、きみの仲間のところまで、逃げられる、だろう』

今度は、分からない言葉まで、はっきりと分かった。分かると同時に、おれは掠れた声で叫んでいた。

『いやだ！ ミック、みかた。ビッチ、にげる、しない。ミック、たすける』

ミックが、足を踏み代えた。

『きみが、力尽きたら、僕は、死ぬ。きみは、これまでと、同じに、旦那様やジェスたちに、もっと、ひどいことを、される。きみだけでも生きろ！』

言い終わると、ミックはおれの背中を蹴飛ばした。

「きゃっ……なにを?!」

ミックがなにををするつもりか、はっきり分かる。おれを逃がすために、自分は死ぬつもりなんだ。

おれは四つん這いに戻るところか、座る台の重みに逆らって膝立ちになった。どこに、

これだけの力が残っていたのか不思議——でも、なんでもない。死力だ。

おれは、ミックが宙を蹴っている足の間、肩をねじ入れた。

「うおおおーっ！」

戦士さながらの雄^{アナーチャ}叫びが、おれの喉から迸った。

「おれを卑怯者にさせたいのか！？ ズンナックの名^{アダーハニツイ}譽に掛けて、おれは逃げない！」

ミックには分からないだろうから、言い足す。んじゃなくて、叫んだ。

『ビッチ、にげる、ない！ ミック、たすける！』

なんて大見栄を切ったけど。脚の力が萎えて、地べたに倒れ込みしまった。

「くそっ……ぐぬううう」

ぐらぐら揺れる地面に四肢を突っ張って、真っ暗闇の中で、おれは四つん這いの形を取り戻した。ミックの足が、おれの背中を踏み締める。

ふう。ひと安心。だけど、もう死力だって使い果たした。すぐに、また潰れてしまうだろう。こんな重たい座る台がなくなつて、朝までどころか真夜中までも持ち堪えられそうもない。

待てよ……座る台？

座る台を乗せられたから、その上にミックを立たせるのが当たり前と思込んでたけど。

『ミック。ケツ、のる、しろ』

声を掛けておいてから、震える手足を少しずつ動かして、おれは前へ進んだ。ミックも足を踏み代え、座る台から下りておれの腰に乗った。

腕に掛かる負担が、ぐんと減った。脚は震えてるけど、膝頭で突っ張っているから、腕みたいに折れ曲がる心配はない。

「ふああああ……」

安心が、大きな溜息になった。肘を曲げて突っ伏しても、腰の高さはあまり下がらない。

ミックがちよっとつま先立ちになれば、じゅうぶんに立っていられる。

なんで、こんな簡単なことに気づかなかつたんだろう。死者の国への門が目の前に現わ

れると、うろたえてしまうんだな。だって、おれは戦士じゃない。魂の弱い女の子だもの。

それから、月と星がゆっくり天を巡って、真夜中になった。腰が痛くなってきたら、しばらく腕を突っ張って。腕が震えてきたら、また肩を地に着けて。

だけど、夜明けまで持ち堪えられそうにない。初夏でも、夜は冷え込む。なのに、素っ裸なんだぞ。寒い。そのせいで、一日半も水を飲んでなくて喉が引き攣れてるってのに、おしっこが我慢できなくなってきた。

裸を羞ずかしいとかは、とっくに感じなくなってるけど、おしっこは羞ずかしい。ので、尻穴をきゅっとすぼめて、内腿に力を入れて、懸命に我慢を続けてる。

そんなときに、ミックが話し掛けてきた。

『ええと……女の子の前で、こんなことをするのは、いけないことなんだけど……』

なあんだ。ミックも、そうだったんだ。聞く前から分かってしまった。

『みず、だす。ビッチも』

『そうか。それじゃ、一緒にしよう』

声が途切れるなり。

じょじょじょじょ……細い水の流れが地面を打つ音がし始めた。

おれも、それまで締めていたあちこちの力を抜いたんだけど……なかなか出ない。出せないと分かったと——ますます出したくなるのに。出そうと思って出せないなんて、初めてだ。

そうこうしてるうちに、ミックの音が小さくなって。生温かい滴りが、尻に垂れた。

『ごめん。掛けてしまった』

それで緊張がほぐれたんだろう。

ぶじゃああああ……

ミックの何倍も激しい勢いで迸った。

痛うううう……悲鳴を上げたいくらいに沁みる。裂けてるのかな、火傷なのかな。

肩が濡れかけて、あわてて両腕を突っ張った。同時に、きゅっと穴を締めて、それも痛

かったので、また緩めた——ら、ころんとなにかが地面に転がった。

顔を俯けて、それを見たら——小さな団栗の形をしていた。本物の団栗じゃない。だけど、鉛でもない。ぱちいかなと思ったけど、好奇心が勝った。左手で肘を突いて身体を支えながら拾って見たら、軟らかかった。

『コルクの銃弾だ』

ミックが教えてくれた。コルクてのは知らないけど、この団栗はうんと軟らかな木材で作られている。

そうだったのか。おれは分かった。ミスタ・セイバーは、おれを殺すつもりなんかなかったんだ。そういえば、火を噴くときの音も小さかった。あれは本物の火を噴く棒じゃなくて、子供の玩具だったんだらう。それとも、棒は本物で団栗だけがそうだったのかな。

どっちにしても、木の精霊の加護なんかじゃなかった。がっかりして、それは間違った考えだと、すぐに思い直した。だって、この団栗は軟らかい木なんだぞ。やっぱり、木の精霊のおかげじゃないか。

そんなことよりも。この団栗、おれの血で真っ赤に染まってる。あまりひどく傷ついたら、治るときに穴がふさがっちゃわないだらうか。ふさがったら——やっぱり、困るよな。白人どもに捕まってるあいだは、ふさがってたほうが……やっぱり、良くない。女穴が使えないってなると、尻穴ばかり突っ込まれるに決まってらあ。そっちのが厭だぞ。

なんて考えるのも、いい加減に脳天気だな。一度は死を覚悟したのに、今だってミックの命が懸かってるってのに。

だけど、脳天気のおかげで。朝まで頑張り通せそうな気がしてきた。いや、気がするだけじゃ駄目で、頑張らないといけないんだ。

——途中を端折ってしまうと。おれは頑張り抜いた。

『ふん。生きておったか。これくらいタフなら、男でも結構な値で売れるだらうな。御婦人方のペットも務まりそうな顔とチンポもしておることだし』

縛首と男棒がどう関係するのか知らないけど、おれもミックも、それ以上はひどいこと

をされずに赦してもらえた。**ミック**は、その日のうちから元通りにこき使われ始めたけど、おれは死にかけてままだった。

二日ぶりに水を飲ませてもらえたけど、飲みすぎたんだろう、すぐに吐いてしまった。冷たいのに喉と腹が焼ける臭いのきつい水を、これは腕に半分ほど飲まされると、そのまま昏倒してしまった。

監禁されていた小屋の中で意識を取り戻したときには、夜になっていた。今度は木の枷じゃなくて、手首と足首に皮革を巻かれて、その上から縄で縛られて、横木から吊られていた。**ミック**がされたのとは反対向きで尻を下にして、両手はひとまとめ、足は左右別々にして開かされていた。これは、女のおれを辱しめるためじゃなくて、火を噴く棒に傷つけられた女穴の手当てのためだったらしい。

というのは、**ミック**のお母さんが朝に食物を運んできて、おれは縛られてて手が使えないから、口に入れて水も飲ませてくれたんだけど、そのときに割れ目も尻穴も洗い清めてから、白人が使っている軟膏を塗ってくれた。おれたちが使っている薬草とは、効き目がまるで違う。一日に一回の食事と手当てだけでも、三日もしないうちに、おしっこが沁みなくなった。

だけど、おしっこは大変だったんだぜ。吊るされたままだから、ふつうに出したら、あちこち飛び散って、跡始末をしてくれる**ヒップ**さんに迷惑を掛けるから、ちょろちょろ出して、尻に伝わる気色悪さは我慢しなくちゃならなかった。うんちのほうは……思い出したくないや。

あ、**ヒップ**さんてのは、**ミック**のお母さんな。白人の言葉で尻って意味だそうだ。ほんとの名前は違うけど、白人には発音しにくいってんで、**セイバー**が改名させたんだとか。

他の**ドレイ**の名前も同じで、**ミック**の妹の**ティティ**は乳首、**ブーブ**小母さんは乳房って意味だそうだ。男はそんな悪趣味じゃなくて、最初の**シイン**（て、なんだ？）を同じにして**ボイン**（て、なんだ？）を**アルファベット**（て、なんだ？）順にしてるんだそうだ。

名前のことは、他にもいろいろ教わった。**ミスタ**は名前の一部じゃなくて、偉い人に付

ける頭言葉だそうだ。それを知ったときから、おれは心の中では絶対にミスタ・セイバーとは考えないようにしてる。

食事を口に入れてくれながら、あれこれ話してくれるから、おれはずっと聞き詰め、ずいぶんと白人の言葉を覚えた。

食事は、だいたい^{とうもろこし}が玉蜀黍を茹でただけが多かったけど。白人の食べ残しだっていうパンというやつは美味しかったな。麦を臼で挽いて粉にして焼くんだそうだけど、ふっくらしてて、ほんのり甘くて。どんな魔法を使ったら、あんなになるんだろ。あ、いや。感心してるんじゃないぞ。玉蜀黍はドレイと家畜の餌だそうだし、他は残飯だってことが言いたかったんだ。

食い物の恨みは、ともかく。ヒップさんには、もうひとつ、大きな恩義がある。何日も手足を縛られてたら、血が巡らなくなって腐ってしまうだろ。それを免れたのは——深夜にヒップさんがこっそり来て尻の下に台を押し込んでから縄を緩めてくれて、早朝になったら縄を締めて台を抜いてくれたおかげだ。

それでも、緩めてくれたのは少しだけだから、傷口が治りかけて痒くなっても、搔くどころか触れることすらできなかった。もっとも、それがさいわいしたのかな。白人の数え方でイッシュウカンも経つと、女穴の裂け傷と火傷は、ふつうに身体を動かすくらいじゃ痛くなくなってきた。

だけど。傷が治るってことは、また新しく傷つけられることを意味していた。

子供の玩具

捕まって八日目だったか九日目だったか（だんだん、怪しくなってきた）。おれはようやく吊りから下ろされて、手も縛られずに小屋から引き出された。

うわ……?!

白人の男の子が、十人ちかく集まってる。セイバーの息子は三人で、ヒップさんはシツジって人にも息子がいるって言ってたけど。三と一を足しても十にはならないぞ？

おれよりもたくさん季節を巡ってるのが、セイバーのいちばん上の息子だ。嘘の処刑をされたときに見物してたな。ボビーだっけ。その横もセイバーの息子でチャールズだったな。もひとり、ずっとちっこいのがエディ。三人ひとかたまりになってる。他には見掛けたことのある顔は交ざってない。

なんて、いちいち区別しなくても、セイバーの子供と他の子たちの見分けは簡単だ。おれを見る目つき。セイバーの子は、おれの裸を見慣れてるけど、他の子たちは目がまん丸。男に裸を見られるのは、そりゃあ羞ずかしいけど、こんなに熱心に見詰められると、くすぐたくて気持ち好いかな。

『おまえたちは、いつも喧嘩や悪戯ばかりしている』

セイバーが、子供たちに向かって何か言った。

『こんな辺鄙な地には、ろくに楽しみがないから、分からんでもない。そこで、今日はこのインディアンを貸してやる。好きなだけ痛めつけて遊べ』

おれは、例の柵で囲った場所へ追い立てられた。子供たちも付いて来る。

『おまえたちも男だ。大勢で牝を鬪るのはいかん。一対一でやれ』

子供たちは顔を見合わせて、もじもじしている。

『僕がお手本を見せてやる』

ボビーが、おれの前に立った。

なにをやるつもりか（どうせ、ろくなことじゃないだろう）と戸惑っているおれに、いきなり殴りかかってきた。

「うわっ……?!」

とっさにかわして、おれは戦いの形に構えた。戦わずに殴られるほうが、かえって無難かなと思ったけど——いくら女だからって、おれはズンナックだ。戦いを挑まれて逃げたりするもんか。

ボビーの顔色が変わった。

『インディアンが白人に逆らうってのか』

こいつ。おれが木偶の棒のように突っ立って、何もせずに殴られると思ってたんかな。だとしたら、見当違いだって教えてやるぜ。

ボビーが、また正面から殴りかかってきた。余裕を持って横に跳ん……だつもりだったけど。おれは十日ちかくも手足を縛られて吊るされてたんだぞ。足がもつれて、無様に転んじまった。ところを、脇腹に蹴りを入れられた。

「かほっ……！」

痛みよりも怒りが込み上げてきた。転がって逃げて、素早く立ち上がった。怒りが、手足の痺れを消していた。

また、なんの工夫もせずに殴りかかってくる。今度は身を屈めてかわして、横っ腹に拳を叩き込んでやった。地べたに崩れ落ちるのは、やつ番だった。

『ストップ!』

セイバーが止めた。

『猛獣と人間が素手で戦うなら、ハンディを付けねばな』

柵の外でセイバーと並んで見物していたジェスが縄を持って近づいて来て——おれを縛った。

「なにするんだ。おれと白人の子を戦わせるんじゃないのかよ?!」

腕力が違いすぎる。背中に渡した短い縄で、両肘を縛られちまった。これじゃ、肘から先しか動かせない。

ジェスは、おれを縛り終えると柵の外へ出て行って——またボビーが目の前に立った。

『思い知らせてやる』

殴りかかると思ったら、さらに踏み込んできて、おれの足を踏んづけた。こっちは裸足、相手はごつい革靴。すごく痛い——よりも、動きを封じられた。

腹を殴られるのを、かわしようもなかった。

「ぐふっ……！」

身体を折って苦しむ——間もなく、顔を殴られた。目の前に星が飛び散って、鼻の奥が熱くきな臭くなった。

『顔はやめておけ。商品価値が下がる』

セイバーが息子を叱ったけど、おれをかばってくれたんじゃないってことくらいは分かる。

ボビーは肩をすくめると、おれの足を踏んづけたまま、立て続けに腹を殴った。じゅうぶんに腕を突き出せないから、たいして効いてないぞ。

『よーし、そこまでだ』

セイバーが止めた。でも、それは——次の子におれを痛めつけさせるためだった、二番手はセイバーの次男坊、チャールズだった。ブーブさんの話だと、おれよりひと巡り若い。そんなやつに、たとえ手が使えなくても、負けるもんか。そういうことをしたら、どんな仕返しをされるかなんて考えずに、こっちから間合いを詰めて——足を高く上げて、脇腹を蹴ってやった。たとえきちんと服を着て（もちろん下帯も着けて）いても、女の子なら絶対にしない仕種だ。

恥をかなぐり捨てた効果は絶大。すっ転んで泣き出しやがった。

ばあん！

足元で砂が爆ぜた。射ち殺すって脅されたときのとは、音が違う。これは、食らったら死ぬ団栗だ。

『インディアンの分際で白人に危害を加えるとは、いい度胸だ。ジェス、足にもハンディを付けてやれ』

足首にも一步分の長さで縄が巻かれた。歩けても、さっきみたいに蹴ることはできない。

『インディアンめ、覚悟しろよ！』

チャールズがおれの横にまわって——背が低いから脇腹には届かず、太腿を蹴った。へん、ちっとも痛くないぞ。

見くびったのが、やつにも分かったんだらう。

『くそっ!』

正面からぐっと近づいて、兄貴を真似ておれの足を踏んづけておいて——膝頭で股ぐらを突き上げやがった。

がつんと、股ぐらに衝撃を受けて、重たい痛みが突き抜けた。

「うぐっ……卑怯者。親父に助けてもらって、縛られた女の子を虐めて。それでも男かッ！」

チャールズが柵の外を振り返って肩をすくめた。おれが何を言ってるか分からないって仕種だらう。でも、罵倒されたってことは、直感してるな。

おれに向き直るなり、肩からぶつかって来て、よけられずにおれが転ぶと、思い切り足を上げて腹を踏んづけやがった。

「げぶふっ……！」

背中が地面に押されて逃げられないから、大人に殴られるよりも痛かった。腹を抱えて転げまわる。

『よくやったぞ』

ぱんぱんぱんと、**セイバー**が拍手した。見物してる餓鬼どもも、指笛を吹いたり、歓声を上げたり。

『次はエディだ。兄貴に負けるんじゃないぞ』

季節を両手の指だけでも巡ってないちびが、柵の中に入って来た。生意気にも五歩くらいの距離に立って、おれが立つのを待っている。

わざわざ笑い物になるために立ち上がったりするもんか。踏んづけようと蹴飛ばそうと、好きにしゃがれ。おれは地面に転がったまま、手足を（縄が許す限り）大きく広げた。

餓鬼どもが、ぶうぶう喚く。臆病者とか弱虫とか罵ってるんだらうな。へっ、卑怯者に何を言われたって平気だ——けど、**セイバー**が出しゃばってくると、身構えちまう。

右手には火を噴く棒じゃなくて、小さな桶を持っている。

『立って戦え。さもないと水を飲ませてやらんぞ』

桶を傾けると水がこぼれた。それを、ぐりぐりと踏みにじった。

こいつは、どこまで残忍なんだ。殴られるのは、その瞬間がいちばん痛くて、あとはだんだん薄れていく。穴に突っ込まれるのだって、ずいぶん長く感じられるけど、実際には太陽がちょこっと動くだけだ。でも渴きは、いつまでも続く。どんどんつらくなる。吊られたり枷も似たようなものだけど、無理に身体を動かせば痛みが強くなって、それが薄れるときに、まやかしても、ほっとする。丸一日水を飲ませてもらえないのと三日間吊るされているのと、どちらかを選ばなくちゃならないんだったら——吊るされてるほうが、まだましだ。

「くそ……おまえだけは、必ず殺してやるぞ、セイバー」

痛い……！

大人の男の重みのをし掛けられて、乳房を踏みにじられた。名前を呼ぶなっことか。ドレイと同じにダンナサマとでも呼ばせたいんかよ。

セイバーが、こつこつと足を蹴った。早く立てって意味だろう。

ちくしょう。惨めだ。水が欲しいばかりに、餓鬼どもにぶちのめされるために……自分の意思で立たなきゃならないなんて。

おれが立ち上がると。

『ヤアアアアッ！』

ちびのエディが、頭から突進してきた。かわしたら、こいつは転ぶ。転んだら、おれがセイバーに痛めつけられる。腹に食らうしかないだろ。

「ぶふっ……」

受け止め切れずに尻餅をついた。エディが馬乗りになって、おれの乳房を、ぱちんぱちんと平手で叩いた。殴るんじゃなくて、柔らかい感触を面白がってるみたいだ。

その気になれば、肘から先しか使えなくても、引っぺがすことも振り落とすことも、殴りつけることだって、できた。でも、されるがままになっていた。セイバーも、立てとか戦えとは、もう言わなかった。

ちびは、ひとりで勝手に腕を振り回してひとりで勝手に疲れて、引き下がってくれた。けど、他のやつは、そんなに甘くなかった。

おれはさんざっぱら、殴られ蹴られ突き倒されて——ついに立ち上がれなくなった。

『もう戦わんのか。明日の朝まで、水も飯もやらん』

さんざっぱら甚振っという、それかよ。でも、明日の朝になったら水をもらえてって安心したんだから、情けない。野生の動物が飼い慣らされていくのと同じに、おれも調教されてってる。ますます惨めで悔しい。

翌日は、また一日じゅう小屋に監禁されてた。もう枷とか吊るされたりとかはせず、右足にごつい鉄の環を嵌められて、短い鎖で鉄の球をつながれた。これじゃ、逃げようとしたってろくに歩けないし、鉄の球を引きずった跡を簡単に追跡される。

閉じ込められてるよりは、ひどい目に遭わされてもいいから外に出してほしい。そんな気持ちも、半分くらいある。

女の子ではおれくらいなもんだけど、ひとりで遠出して、太陽が三回くらい沈んでから戻ってくる者も珍しくはない。だから、おれが居なくなったと仲間が気づいて探しに掛かったときには、おれは小屋の中に吊るされていて、見つけられなかったはずだ。戦士でさえも白人の縄張には出来るだけ近づかないようにしてるから、おれがしょっちゅう外に出てないと、見つけてもらえないだろう。でも、見つけてくれて、それからが……

こっそり助けに来てくれるならいいんだけど。正面から堂々と掛け合ったりしたら——八年前の虐殺の再現だ。だから、見つけて救ってほしいって気持ちも半分だけなんだ。

……セイバーのやつ、おれをどうするつもりなんだろ。ミックなんか、縛首を赦されたその日のうちから働かされてたのに。おれは傷が治り切ってないから休ませてくれてるんだったら、いいけど。昼は子供の玩具がわりにされて、夜は男どもの慰み物にされる——

なんてのは、絶対に厭だぞ。

と思ったところで、セイバーのやつがそう決めたら、おれはそれに甘んじるか——さもなくば殴られたり、ドレイみたいに鞭打たれたり（音と悲鳴が、小屋の中まで届く。それも、毎日だった）、食事も水も与えられずに、それでも屈せずに頑張ったところで、夜は力づくで穴を使われるに決まってる。そりゃまあ……ジェスがしてくれたみたいに、乳首やメシベをくすぐられて、身体が破裂……なんでもないぞ。

小屋に監禁されて。朝に一回だけ、ヒップさんが水と食事（というより、餌だな）を運んでくれた。

昼過ぎには、これまで見掛けたことのない男が来て、うずくまっていたおれを立たせて、身体にあちこち紐を巻きつけたり短い棒をあてがったりしたけど、縛ったり叩いたりじゃなかったの、好きにさせといた。縛ったり叩いたりだって、好きにさせるしかないんだけどな。

夜になってからは、ジェスがひとりだけで小屋に来た。

『もう使えるようになったんじゃねえかって、皆にせつつかれてな。具合を確かめるのも、亭主の務めってわけだ』

いそいそと、袴と下穿きを脱ぎやがる。男棒も仕上がってる。簡単に組み敷かれちゃった。

こいつは、いちばん最初におれを虐めた白人なんだ。おれの初めてを捧げた男なんかじゃない。羽根だって、火を噴く棒で射ち砕かれてるんだぞ。それなのに——押し返す腕から力が抜けてく。ちょっと割れ目を触られただけで、女穴の奥が、じゅんってなっちまう。

くりくりっと乳首を転がして、メシベをつまんでおれの腰をぴくんと跳ねさせると、それ以上はそよ風を吹かしてくれずに、あっさり押し挿ってきた。

痛い……最初のときほどじゃないし、引き裂かれるってより、挟じ開けられるみたいな痛み。女穴を嘘の火を噴く棒で射たれた傷のせいだ。

『うおおっ……なんだ、こりゃあ?!』

ジェスが素っ頓狂な声を上げやがった。

『絡みついてきやがる。ヴァージンのときより狭いんじゃないかねえかよ。くそお、たまらねえ!』

へこへこと数回腰を動かしたら、すぐに子種を出しちまったらしい。無然とした顔で身仕度を整えた。

『具合が良すぎて、愉しむ暇もねえ。もしかして、中で発砲したせいかな。傷が妙な具合に癒着して。だったら、感謝してもらいてえな。どこへ売られても大切に扱われる道具になったんだぜ、おい』

思い切り馬鹿にしてるような、でも思い切り優しい声で、わけの分からないことを言うと、ジェスは出て行った。

さっさと済ませてくれたおかげで、たっぷり眠れるんだから、それでいいや。

翌日は、また子供たちの玩具にされた。今度は女の子の番だった。男の子みたいに友達が街から遊びに来たりしないので、ポビーよりふた巡り上のアンナと、エディのひとつ上のデイジー、この二人だけを相手にすれば良かったし、女の子は殴り合いなんかしないから、楽ちんなはずだったのに——終わってみたら、一昨日どころか、嘘の処刑よりもひどい怪我をさせられていた。悪いのは姉妹じゃなくてセイバーとダニーなんだけど。

やっぱり、朝だけ水と食事を与えられて。尾錠の付いた革の帯で後ろ手に縛られて外へ引き出されたときには、太陽が頭上を過ぎていた。

足の環と鉄の球をはずされて、代わりに妙ちきりんな装具を——男と女で違う部分にはばかり着けられた。

鳥籠みたいな物を乳房のそれぞれにかぶせられて、革帯で胸を締めつけられた。巻いた鉄の線の力できつく噛み合う木の口に乳首を咬まれて、その嘴から伸びる紐が鳥籠の天辺から引き出されて、鉄で作られた小さなすぼんだ花を下向きに吊るされた。花の芯には仕掛があって、軽く振るだけで、からんころんと音が鳴る。のはともかく……乳首が痛い。

これまで、さんざっぱらあれこれ痛いことをされてるから、千切れそうなくらいに感じて
も、ただ痛いとだけしか言わないけどよ。

両側に円盤がひとつずつ付いて二人分の腰掛を備えた櫓が、おれの後ろに置かれた。櫓
からは、途中で鎌首をもたげた鉄の柄が一本だけ突き出ている。柄の先からひと握り手前
には、鉄の棒が上向きに作りつけられていた。柄がおれの足の間に通されて引き上げられ
て——上向きの鉄棒が、女穴に押し込まれた。男棒よりきつい。腰に革帯が巻かれて、柄
の途中にある金具につながれた。セイバーがおれの股ぐらをまさぐって……

「あんっ……」

声が出ちまった。だって、メシベの皮をにゆるんて剥かれたんだぜ。いきなり熱風に吹
きつけられた。

木の嘴が股ぐらに隠れて……

「きひいいいっ……」

鋭い痛みが、メシベから腰の奥へ向かって突き抜けた。木の嘴はぎざぎざになっている。
そいつに花卉を剥かれた花芯を咬まれたんだ。こんなこと、おまえの娘にやってみろ、涙
を流して泣き叫ぶぞ。

この嘴に結ばれている紐は、鉄の柄の先っぽが二股に分かれているところを通されて、
小さな鉄の箱をぶらさげられた。中は空っぽで、鉄の花と同じような仕掛があつて、こい
つは、がらんがらんと鳴る。鉄の花より、ずっと重たい。それを、乳首の何倍も感じやす
い突起に細い紐で括りつけられたんだぞ。

最後に、短い鉄の棒を口に噛まされて紐で頭に縛りつけられた。棒の両端からは別に革
紐が伸びている。

くそお、分かってきたぞ。セイバーは、おれに櫓を曳かせるつもりなんだ。じゃあ、こ
の棒は馬の口に噛ませるやつだ。革紐が、馬の首を左右に向かせるやつ。

案の定、アンナとデイジーが櫓に乗り込んだ。アンナが革紐を左手に握って、右手には
おれまで届く鞭を持っている。

『ハイヨー』

びしっと、鞭で尻を叩かれた。もっと餓鬼の時分に男の子と喧嘩して棒で叩かれたことはあるけど、捕まってからは**ジェス**に革帯で叩かれもしたけど。叩くためだけに作られた鞭だなんて、生まれて初めての屈辱だ。でも、いちいち逆らって**セイバー**に懲らしめられるのは厭だから、馬鹿々々しいと思いながら前に進もうとして——これが、簡単じゃなかった。

櫓の重みが全部、女穴に掛かってくる。後ろへ引っ張られて、突っ込まれるのとは違う鈍重な痛みが腰を引き戻す。前へ進もうと足を踏ん張るのは、自分で自分を虐めてるのと同じだ。

『こら、進め。ハイヨー』

びしっ、びしっと、鞭が尻を叩く。革帯とは比べものにならない、ちゃちな痛みだけど、悔しい。馬の真似をさせられるのも惨めだ。でも、これっぽちの重みに音を上げたなんて思われるのは、もっと悔しいぞ。

「くそおっ……」

ぐっと足を踏み込んだら、思い切り女穴を抉られて腰が引けた。なのに、櫓がちょっとだけ動いた。

そうか。柄から突き出た棒にこだわってたんだ。むしろ、身体を倒してやれば——腰に巻かれた革紐で櫓を引っ張れる。

身体をうんと倒して、櫓が動いてつんのめりそうになるのを、足を運んで支える。そのこつを体得すると、わりと楽に（でも、女穴は痛いぞ）進み始めた。

からんころん、がらんがらんと、花と箱が鳴って。

「あっ……？」

三点を熱いそよ風が吹き抜けた。音が紐を伝わって、木の嘴を震わせてるんだ。これって、指でつままれて揺すぶられるのと同じだ。痛みは増すけれど、そよ風のほうが強い。

からんころん、がらんがらん……花と箱を鳴らしながら、おれは櫓を引っ張り続ける。

『右！』

革紐を引っ張られて、かくんと顔が右へねじられた。向きを変えろって意味だ。後ろに橇を引っ張っているから、歩いて向きを変えるのとは勝手が違うけれど、なんとか曲がれた。

『おもしろそう。デイジーにもやらせてよ』

ちび娘が革紐と鞭を持った。

『ハイヨー』

ぺちぺちと、立て続けに鞭でおれの尻を叩く。ちっとも痛くないぞ。でも、セイバーが見てる。おれは素直に橇を曳いて歩いた。

柵で囲まれた中を一周すると、アンナが面倒なことを言い出した。

『この中を巡るだけじゃ面白くないわ。牧場の外へ出たい』

こんな鬼畜野郎でも父親なんだな。娘には甘い。

『オーケイ。だが、用心棒はいるな。おおい、ダニー』

ジェスの弟分(かな)のダニーを呼びつけて、何事かを命じた。ダニーは引き返して、馬に乗ってすぐ戻って来た。誰も乗っていない馬を一頭曳いている。そっちの座る台には、火を噴く長い棒が二本も備えてあった。

ここら辺って、そんなに物騒なんかなと不思議に思って、白人にとって物騒なのはおれたちズンナックだと気づいた。部族の若い娘が裸で橇を曳かされてるなんて、見つけたら問答無用で助けにかかるよな。手斧や弓矢はもちろん、たくさんの毛皮や織物と交換で白人から手にいれた、数少ない火を噴く棒まで持ち出すぞ。

『何かあったら、こいつで連れ帰ります』

そうだ。ボクジョウの外なら、戦士はダニーだけだ。隙を見つけて逆襲してやる。絶対に負けないぞ。そして、この二人を人質に取れば、有利な条件で和平に持ち込める。

『ハイヨー』

また鞭で尻を叩かれて。そんなのはちっとも気にならず、おれは勇んで橇を引っ張った。

からんころん、がらんがらん……立て続けに熱いそよ風にくすぐられるうちに、女穴を後ろへ引っ張られる痛みが、だんだん痛みでなくなってくる。そよ風と絡みあって、全身に強い風が吹き荒れ始める。頭が、ぼうっとしてくる。もっと風を強くしたい——なんて、思っていないのに。勝手に足が速くなっていく。倒していた上体を起こして、腰の革紐ではなく女穴の鉄棒で橇を曳くみたいになっていく。

『お嬢さん。馬の勝手にさせちゃいけませんぜ』

『ドウドウ』

革紐がぐっと引かれて、おれは我に還った。

『馬も奴隷も、主人の意のままに操らなけりゃ、思い上がります。ミスタ・セイバーは、それを教えたくて、わざわざ仔馬でなくインディアンに曳かせてるんです。まあ、そのハーネスは、どうかと思いますかね』

『でも、インディアンは奴隷じゃないわ』

『そう、家畜じゃありません。野生の猛獣です。だから、いっそう厳しく調教しなくちゃならんのです』

ややこしいことを言ってるけど、要するにおれたちインディアンはドレイよりも劣っているという意味だろう。

ふざけるなよ。メックは老人だから数えないとしても、マックとミックとモックとムック——それと同じ数だけ、ズンナックの戦士が居てみろ。セイバーと十人の手下なんか、みんなぶっ殺してやる。シツジの一家は白人だけどドレイと似たようなものらしいから、命は取らないけどな。でも、セイバーの三人の息子は、殺す。アンナとデージーは……妹のほうは幼いから見逃してやるけど、姉には、おれが受けたのと同じ屈辱を味わわせてやるとも。

『あら、もう川の近くまで来てるわ。せっかくだから、水遊びしていきましょうよ』

おれの内心の怒りを知るはずもなく、アンナがのんきなこと（に決まってる）を言う。

『わあい。遊ぼう』

デイジーがはしゃぐ。

『駄目ですぞ。水の近くは危険だと、ミスタ・セイバーもおっしゃってるでしょう』

アンナはダニーの言葉が聞こえないふりをして、おれに鞭をくれた。

おれは、迷うことなく川へ向かって進んだ。おれを操ってる（とは、絶対に認めないぞ）のはアンナとデイジーだし、ダニーが困ることなら、喜んで白人娘の悪戯に付き合ってるさ。

川のほとりに着くと、アンナは真っ先におれのハーネスを外しに掛かった。

『お嬢さん。何をなさるんで？』

『このインディアンを洗ってやるのよ。垢だらけで、おまけに臭いわ。レディの乗り物を曳くのにふさわしくないでしょ』

『勘弁してください。俺が叱られます』

『そんなこと、あるもんですか。馬を洗ってやれば、褒めてもらえるに決まってるじゃない。あ、そうだ。逃げられないように、投げ縄を首に掛けといてね』

おれは櫓から解き放たれて、乳首もメシベも女穴も、すっかり軽くなった。物足りなくなんか、ないぞ。

おれを水に浸ける仕度が終わると、自分たちが服を脱ぎ始めた。

『ちょ、ちょっと……』

ダニーが姉妹に向けて腕を突き出し顔をそむけた。

『見ないでよ。あ、インディアンは、しっかり持っていてちょうだいよ』

勝手なことを言って、二人とも下穿きひとつの姿になった。白人って、そういう体質なのか、食い物が良いからなのか。まだ季節を両手の指だけでも巡ってないくせに、デイジーの胸は乳房ってほどじゃないけど、膨らんでる。あと幾つも季節を巡らないうちに、おれに追いつくんじゃないかな。姉のほうは……川面に太陽の光が照り返して、きらきら輝いてるなあ。

『さっさと川に入るのよ』

デイジーが鞭でおれを叩いて、川へ追いやる。アンナは櫓の腰掛の下から箆を引き出して、束子を持って来た。おれたちのと違って、棍棒に棘を植えたような形をしてる。こんな物を用意してたってことは、この場での思いつきじゃないな。

川は浅くて、せいぜいデイジーの膝あたりまで。おれは言われるままに四つん這いになって、背中まで水中に沈めた。

姉妹が両側から、束子でおれの身体をこす。草の茎を束ねたおれたちの束子と違って、無数の針で肌を引っ掛かれる。痛いけど、おれより弱っちいやつに泣かされるなんて面子にかかわるから、平気な顔をしてやる。

『ここは、特に良く洗わないとね』

アンナの持つ束子が股ぐらにまわって、割れ目を強くこすった。鋭い毛羽が突き刺さる。
「きひいっ……」

びくんと、腰を引いた。ぱちんと尻を叩かれる。痛くはないのに悔しい。

『じっとしてなさい。綺麗にしてやってるのが分からないの？ インディアンって、馬よりもお馬鹿さんのね』

殴ってやりたい。でも、喧嘩にはならず、首縄で引き寄せられてダニーに殴り倒されるだけだ。そして牧場へ連れ帰られて、また残酷な懲罰に掛けられる。

おれは、ちくちくひりひり痛いのを我慢して、アンナの好き勝手にさせた。背中や腹をこするよりもずっと強くしつこく、アンナはおれの股ぐらを洗った——んじゃないな。虐めたんだ。捕らわれた最初の夜に、おれが牧場の男どもに犯されたのを知っているんだな——と、直感した。そんなおれを、ただインディアン、白人じゃないってだけでなく、女として穢れてると思ってるんだ。おれだって——というよりズナックは、誰彼かまわず抱かれる女は軽蔑する。でもおれは、自分の意思で股を開いたんじゃないぞ。

気が済むまで（男の子十人に比べたら、すぐに飽きてくれた）おれを虐めてから、おれはダニーに任せて、二人で遊び始めた。水の掛けっこをしたり、流れの中に寝そべってみたり、それで下穿きが濡れたから素っ裸になって、川原で小石を積み上げてみたり。

妹のほうは無邪気に遊んでるけど、**アンナ**は——裸になってはいけない場所で裸になる後ろめたさを愉しんでいる。それが、おれにはよく分かる。だからって、親近感なんか感じない。妹も**ダニー**もいなかったら、**アンナ**は割れ目も悪戯したかもしれない。何をしよう、この十日あまりにおれがされたことに比べたら、赤ん坊の指しゃぶりと変わらないけどな。

二人が水遊びに飽きるまで、おれはずっと苦痛に耐えていなければならなかった。**ダニー**に引き渡されてすぐ、ハーネスを着けさせられたんだけど、鬱憤晴らしに革紐を前よりもきつく締めつけられ、木の嘴の上にも細い紐を巻き重ねられて痛さが倍になった。しかも、鉄の花にも箱にも小石を詰め込みやがって、痛さは倍の倍に跳ね上がった。**ジェス**の子分みたいなやつに虐められたって、泣くもんか。歯を食い縛って耐え抜いたさ。

帰り道では余計な重石は勘弁してくれたから、倍になっただけの痛みなら——頭がぼうっとしなくて、泣きたいくらいにつらかった。

屈服の兆し

あまり太陽が傾かないうちに**ボクジョウ**へ帰り着いて——それからが、おれのほんとうに痛くて苦しくて惨めな一日の始まりだった。

草原の一面を勝手に柵で囲んだ、森よりも広い内側。それが、白人どものいう**ボクジョウ**だ。その柵の出入口のところに、**セイバー**が一人で立っていた。不機嫌と心配がごっちゃん顔をしている。

『ずいぶん遅かったな。何かあったのか？』

『いえ、それがですね……』

ダニーが、**オジョウサン**たちが何をしていたかを告げ口した。

『おまえたちは、わしの言いつけを守らなかったんだな』

『ごめんなさい、パパ。だって、お天気が良かったし、夏みたいに暑かったし……』

『いくら、わしが娘に甘いといっても、限度がある。今日は、厳しくお仕置をするぞ』

『ごめんなさい。これからは、決してパパの言いつけにそむきません』

『いいや、駄目だ。鞭で懲らしめてやる』

アンナもデージーも震え上がったんだろう。おれからは見えないけど。

『とはいえ、わしも可愛い娘を泣かせたくはない。そこで、身代わり小姓に倣うとしよう』

『……？』

鞭打たれなくてすみそうだと、ふたりは父親の次の言葉を待っている。

『旧大陸の王宮で行われていた制度だ。王子が悪いことをしても、玉体を傷つけるなど、家臣として畏れ多い。そこで、小姓を代わりに罰する』

セイバーが、おれに目を向けた。

『このインディアンを、おまえたちの身代わりにする。おまえたちのせいで、こいつが鞭打たれるのだ。こいつが無様に泣き叫ぶのを見て、反省しなさい』

『はあい、パパ』

こいつら、絶対にぺろっと舌を出してやがるぞ。

ふざけるなど言いたいところだけど、言えば鞭打ちだけで済まなくなるってのが分かりきってるから……くそお、ドレイみたいにおとなしく虐められるしかできないのかよ。

おれはハーネスを外されて、そのまま、剥き出しの地面を柵で囲ったところへ連れて行かれた。ここは、まだ人に馴れていない馬を調教したり、男どもが力比べや遊びの取っ組み合いをしたり、十日前におれとミックがされたように、ドレイやインディアンを虐めるのに使われてる。

おれは十日前と同じように二本の柱の間に、手足を広げて磔にされた。違っているのは、両足が地面に着いているのと、馬櫓遊びの間ずっと木の嘴に咬まれていた乳首とメシベに血が滲んでいるのと、その代わり割れ目と尻穴は(そんなに)傷ついてないってことかな。

セイバーが鞭を握って、おれの前に立った。馬櫓遊びの鞭とは全然違う。棒の先に革の

帯紐がつながってるんじゃないくて、全体が先細りの編み上げになっている。根元は手斧の柄くらいも太くて、先っぽは指よりも細いけど膠で固めたみたいに黒光りしている。巻いて持っていた鞭を伸ばすと、長さはおれの背丈の倍ほどにもなった。これは……コルクの弾と鉛弾ほどにも違うぞ。

ひゅううん、ぱっしん！

空中で鞭先を撥ねる音からして、恐ろしい。

『わしは優しい男だ。今夜のことを考えて、背中と尻は傷つけないでおいてやる』

セイバーがわけの分からないことを言う。つまり、身体の正面を鞭打つんだろ。尻より、よほど痛いに決まっている。見物に集まった男どもが一斉に嗤ったのも、意味が分からない。のは、おれとデージーだけらしい。姉のほうは、顔を赤くして俯いた。

いよいよセイバーが、おれに向かって鞭をかまえた。腕を後ろへ引いて、身体までねじって。

ひゅううん、ずばっちん！

「きゃああああっ……！」

意地でも泣き叫んだりするもんかと心に誓っていたのに、最初の一撃で打ち砕かれてしまった。乳房を刃物で切り裂かれながら棍棒で殴られたような、鋭くて重たい激痛だった。

ひゅううん、ずばっちん！

二発目も乳房に打ち込まれた。乳房が胸までめり込んでから、掌からこぼれない大きさをしかないのに、**アンナ**のたわわみたいにぶるるんって爆ぜた。

たった二発で、乳房全体が赤黒く腫れ上がった。鞭が直接当たったところは、肌が裂けて血が滲んでる。

セイバーが一步踏み込んで、低い位置から鞭を繰り出した。狙いが外れた——と思ったのは一瞬。脇腹に叩きつけられた鞭は、おれの胴をひと巻きしてから、鞭先が背中を軽く叩いた。それはたいして痛くなかったけど、鞭が引き戻されるときに肌を切り裂いて、まるで赤い帯を巻いているみたいになっちゃった。

四発目と五発目は臍の下を打たれて、乳房のときほどじゃないけど、悲鳴を堪えられなかった。

くそ……悲鳴はしょうがないけど。絶対に泣いたりなんかしないぞ。

ひゅううん、ばちいん！

今度は脇腹を打たれて、背中を巻いた鞭先が乳首を直撃した。

「きひいいっ……！」

そこからは五六発ばかり、身体の正面を滅多打ちにされた。

膝が碎けて、両腕で吊られた形になった。

セイバーが鞭を引きずりながら、おれに近づいた。唾を吐き掛ければ届く近さだ。でも、やめておく。仕返しが怖い。

『赦してほしいか？』

虫を巢に絡め取った蜘蛛みたいにねちっこい口調。

『お赦ください、御主人様——こんなふうに懇願するなら、考えてやらんでもないぞ？』

セイバーへの呼び掛け方は、いくつかある。ドレイは、必ずゴシュジンサマと言う。シツジはたいていダンナサマで、雇われている男どもはミスタ・セイバーだ。たまにボスと呼ばれると機嫌が悪くなると、ミックが言ってたっけ。逆にジェスはチーフと呼ばれるのを好むそう。は、ともかく。ゴシュジンサマというのは、最もいいいな呼び掛けってことだな。誰が言うもんか。

『どうした。言葉は分かるとるはずだぞ。それとも、ここにも鞭を食らいたいのか？』

セイバーが鞭をおれの股ぐらに通した。前後を握って引き上げて、割れ目に食い込ませる。

『強情を張ると悲鳴だけでは済まなくなるぞ』

鞭を前後にしごく。ますます割れ目に食い込んできて、女穴の入口までこすられる。

「ぐう、ううう……」

編んだ革の縁が、柔肉を切り刻む。血が流れて鞭が滑り始めるのが分かった。

『そうか。そんなに鞭を食らいたいんだな』

セイバーが後ろに下がった。鞭を地面に這わせたまま、腕を真後ろに引いて……

しゅううん、ばっちいん！

「ぎゃわあゝあゝあっ……！！」

おれは大声で吠えた。鋭いとか重たいとかじゃない。豹の爪で切り裂かれたような、ぎざぎざの激痛で割れ目を真っ二つにされた。

ちくしょう。なんだって、こんな目に遭わされなけりゃならないんだよ。勝手に柵で囲って、その中に入ったからといって捕まえて犯して……自分の娘が言いつけにそむいたからって、おれを鞭打って。何もかも、悪いのは白人じゃないか。

戦士がいたらなんて、情けないことを考えるな。おれが受けた仇^{あだ}じゃないか。おれが仇を討たないでどうするんだ。

決めた。セイバーはおれの手で殺す。セイバーだけじゃない。ジェスとダニーもだ。

『まだ強情を張るつもりか！』

ずばっちいん！

「がわあゝあゝあっ！！」

くそお。このままじゃ……殺されはしないだろうけど、まともに動けるようになるまで、また何日も掛かっちゃう。

今このとき、この場での名誉を捨ててでも——大きな名誉をつかみとるんだ。

『……ゆるして、ください。ゴ、ゴシュジンサマ』

これは言葉じゃないぞ。白人が嘔^うずってるのを真似しただけだ。

そんな誤魔化しは、すぐに打ち砕かれた。

『そうだな。では、こう言え——素直に股を開きますから、女として可愛がってください』

くっ……言うだけじゃ済まない。言った通りのことをさせられるんだ。

縛られたり押さえつけられたりして、男棒を突っ込まれるのは、おれが弱っちいから、悔しいけど仕方のないことだ。だけど、自分から男を誘うみたいな真似は、絶対に厭だ。

そうは思っても。力比べと同じだった。一歩だけでも押し込まれたら、ずるずると押されてしまう。

ちっぽけな名誉なんか投げ捨てて、おれは必ず復讐を果たす。強く心に念じながら、おれは**セイバー**の言葉を繰り返した。目を伏せてしまったのは、心の中で荒れ狂っている炎を見抜かれないためだ。気後れしたわけじゃないぞ。

『ふふん。いいだろう。赦してやる』

ジェスが縄をほどいてくれた。

『言ったことはちゃんと守って、いい子にしてろよ』

どういうつもりか、血のにじんでる股ぐらをぼんぼんと掌で叩いた。それから、足首に鉄の球をつなぎやがった。

『おまえたちは、家へ戻れ』

二人の娘を追い返して、**セイバー**は——くそ、手を引っ張るとか、遣りようは幾らでもあるだろ。おれの乳首をつまんで、小屋のほうへ引っ張りやがる。**ジェス**と**ダニー**、他にも三人くらいがついて来る。

男どもは小屋の隅から藁を持ち出して地面に敷いた。その間に、**セイバー**は下半身を裸になっていた。男棒は水平くらいまで鎌首をもたげてる。

『どうした、インディアンのビッチ。何をすると行ったか、覚えているな？』

すなおに、またを、ひらきますから、おんなとして、かわいがってください。

くそお。おれは両手をきつく握って——反抗的だと思われたら、また処刑場へ引き出されるかもしれないので、すぐに力を緩めた。

股を開くためには、仰向けにならなくちゃいけない。いやだいやだいやだ、悔しい悔しい悔しい……心の中で何十回と繰り返しながら、おれは藁の上に寝転がった。恥辱に耐えて、脚を開いた。

『それじゃ、嵌めにくいだろ。膝を立てて腰を浮かせよ』

セイバーの御機嫌取りのつもりか。ジェスがおれに指図する。

やりや、いいんだろ。これも、力比べと同じだ。押し込まれだすと、どこまでも押されちまう。挙句に、こんな台詞まで言わされた。

『ゴシュジンサマ、ビッチのマンコに、チンポをはめて、ください』

『そこまでねだられては、叶えてやるのが慈悲だろうな』

セイバーがのしかかってきやがった。おれを組み敷いて、まだ硬くなり切っていない男棒を割れ目にこすりつける。さっきジェスが掌で拭っているから、血はそんなに付かない。

すぐに、突っ込めるくらいまで硬くなって。

痛い……火を噴く棒の怪我は治ってる感じだけど、ジェスも言ってたように傷が変な具合にくっついてるんだろう。ちょっとこじ開けられては男棒が入ってきて、そこでまた別の場所を抉じ開けられてるような。ぐに、じゅぐ、ぐに——みたいな感じだ。その都度に痛みが奔る。

『なるほど……これは、すごい。褻がうねっているような感触だ』

ジェスほど呆気なくはなかったけど、せいぜい心臓が百拍つくくらいで、セイバーも終わってくれた。

セイバーは、とっとと小屋から出て行って。これで（すくなくとも今日は）もう虐められずに済む——なんて安心したおれが馬鹿だったぜ。ついて来た連中は出て行かない。

『十日も待たされたんだ。今日は金玉が空っぽになるまで可愛がってやるぜ』

くそお。すごく悔しい。でも、あまり腹は立たなかった。おれが弱っちいのが悪いんだ。弱いやつは強いやつに組み敷かれて当然だ。だけど、こいつらは、弱い者に優しくしてくれない。護ってくれない。まったくの、やらすぶったくりだ。それが、白人のドレイやインディアンに対する遣り口なんだ。

おれは諦めた。せいぜい素直にして、早いとこ全員の金玉を空っぽにするように務めるしかない。

おれは仰向けに寝転がったまま、誰か（ジェスだったらいいのに——なんて、これっぽっちも考えてないぞ）がのしかかって来るのを待った。

でも、こいつらはそんな優しさ(?)すらもなかった。

『宣教師の真似なんか、してんじゃねえよ。とっとと四つん這いになりやがれ』

『ビッチにや犬の格好が似合ってる』

四つん這いにさせられた。そういう形で番^{つが}ってるのも覗き見したことあるから、あまり気にしなかった。ビッチてのが牝犬を意味する悪い言葉だとは、もう知ってる。けど、おれにそんな格好をさせたのは、もっとちゃんとした(?)理由があった。仰向けに寝転がってちゃ、口が使えないっていう。

だけど、口に一本を咥えさせられてる間に、女穴には取っ替え引っ替え三本が突っ込まれた。

『こいつは、すげえ!』

『下の口にも舌が付いてて、それで舐めまわされてるみてえだ』

別に、おれは気持ち好くなんかねえけどな。まあ、ジェスが横から手を突っ込んでメシベを弄ってくれたから、それでいいや。

女穴に突っ込んで、心臓が百か二百拍つくらいで満足してくれるから、途中で新手が増えても、最初の日に比べたら、ずっと楽だった。

『こうなると、上の口がもの足りねえな。どうだ、こっちにも一発ぶっ放してみるか』

火を噴く短い棒を口に突っ込まれたときは、そいつが冗談を言ってるのは分かってたけど、団栗を破裂させる鉤が起きてたから、やっぱり怖かった。しゃべっても首を振っても暴発するかもしれないから……固まっちゃった。十日前のおれだったら、暴発するかしないかは祖霊に委ねてぶん殴ってただろうけど。白人の言いなりになっちゃってるおれに、加護は望めない。

でも、ジェスが助けてくれた。

『殺しちゃったら、洒落にならんだろうが。歯を抜けば具合は良くなるが、せつかくの可愛い顔が台無しになるしな』

うわ、白人に可愛いなんて言われたのは初めてだ。どころか——実は、仲間からも言わ

れたことがないんだよな。男の子みたいにきつい顔立ちだから。部族の子たちは、おれの顔について言うときには、決まって「胸と同じで」なんて余計なことを付け足す。だから、まともに可愛いなんて……言われたって、ちっとも嬉しくなんかないぞ。おれの初めてを無理矢理に奪った男に言われたんだ。腹を立てなくちゃならない。

『けっ。こんな赤っ茶けた顔が、おまえの好みかよ』

『高慢ちきだったり甘ったるかたたりするよりは、これくらい男前なほうが、味があらあ』
やっぱり、ジェスも殺してやる。

そうだ。いっそのこと、ジェスにだけは従順になって、甘えてみるかな。もしも、縛られてないときに抱いてくれたりしたら——いつも腰に吊るしてる火を噴く棒を奪えるかもしれない。射ち方は、見て覚えた。できたら、鉄の球を足に付けられてないときがいい。ジェスを射ち殺して、セイバーを追いかけて……

『フェラチオは、どうでもいいや。それより、もうちっと仕込んでやろうぜ』

そう言った男——ゴードンだっけ、ジョージだっけ。こいつらと顔を突き合わせるの、おれを犯すときだけで、そんなときにはぺちやくちゃしゃべらないから、なかなか覚えられない。覚えるつもりなんか、ないけどな。

とにかく、そいつはおれを突きつけて、藁の上に仰向けに寝転がった。男棒は天を指している。

『いつまでもビッチばかりじゃつまんねえだろ。馬の乗り方も覚えろや』

つまり、おれが上になれってことだろ。兄ちゃんディニスクオス・ダットツォと煌めく朝露さんがしてるのを見たことがある。だけど……自分から男に、それも白人の男に嵌めにいくなんて、絶対に厭だ。力づくで犯されるのは、おれが弱っちいんだから仕方がないけど。だから、さっきみたいに仰向けにされて押さえ込まれるほうが、四つん這いよりも悔しさは小さい。でも、こいつらは口と女穴の両方を使わないと満足しないみたいだから。

『ビッチ、ビッチだから、いぬをする』

もうちょっと、気の利いた言い方をしたかった。最初のビッチはおれのこと。白人みた

いにオレとかワタシって言うと、生意気だって殴られるんだ。別に自分のことを
アスツァツハ・セツツァエ
牝 犬 と言うんじゃないから、ビッチで言えば殴られないんなら、それでいいや。

『さっきまでポニーだったくせに、何言ってやがる』

男が半身をを起こして、おれの股ぐらに手を伸ばす。逃げようとしたら、他のやつに肩を
押さえられた。

メシベをつままれて、引き寄せられる。痛いのを我慢すれば名誉を保てるのなら、そう
するけど。もっと痛くされて屈服させられるのは分かってるから——男の腰を跨いで膝を
突きちまった。

『ほら、こっちだ。もうちょい奥かな』

メシベで引っ張られて、割れ目に男棒を挟んじまった。簡単に降参してしまう自分が情け
ないけど、でも、これって——無理強いされてることに変わりはないよな。じゃあ、仕方
ないか。おれは諦めて、腰をさらに落とした。

ずぶっと、簡単に嵌まっちゃった。

『おら。嵌めたら動け』

ベントやつ（だと思ふ）が、背後から肩越しに、おれの乳首をふたつともつまんだ。つ
まんで、上に引っ張った。痛いので腰を浮かすと、今度は下へ引っ張られた。

『ワン、ツウ、ワン、ツウ……』

痛いから、痛くないように逃げてるだけだ。男の上で腰を振ってるんじゃないぞ。でも、
女穴の中で男棒が、ぐにぐにずぶずぶ動いて……

『なるほど。こりゃあ名器だ。チーフが惚れ込むのも無理はねえや』

『馬鹿野郎。誰がインディアンなんぞに惚れるか。だいいち、こいつはミスタ・セイバー
の持物だ。ボーナスをもらったからには、そうなるだろ』

ボーナスてのがどんな物かしらないけど、おれはその品物と交換されて、ミスタ・セイ
バーの持物になったってことだな。へん、気にするもんか。どうせ、二人とも殺してやる
んだから。そのためにも、今は従順な振りをしておくほうがいい。なんか、だんだん、振

りが振りでなくなってきたような……ことなんて、絶対にないぞ。

——結局。陽が落ちるまでに、セイバーが雇っている十人のカウボーイ（シツジではなくて、ボクジョウの世話をしてる荒くれども）の全員に犯されて。連中（だけ）が晩飯を食ってから、また十人掛りで。多いやつは三回も四回も。金玉の中には、すごい量の子種が貯められてるんだと、呆れちまった。一回ずつは短かったけど、それでも三十回だぞ。せっかく治りかけてた傷口が開いて……血まみれになったから、やる気が失せてくれたんだろうけど。

新たな獲物

翌日は、また一日じゅう小屋に監禁された。休ませてくれたわけだけど、親切からじゃないのは、もちろんだ。おれは、大人にとっても餓鬼にとっても、面白い玩具だ。壊さずに傷を治しながら使うってことだ。

その翌日——捕まってから、ニシュウカンになるんかな。おれは朝っぱらから、また男の餓鬼どもの玩具にされた。玩具というよりも、狩りの獲物だ。

手足をそれぞれ折り曲げられて、濡らした革紐で縛られた。革は乾くと縮むから、丸一日もそのままにされると、血の巡りが途絶えて手足が腐っちゃう。

『好きな所へ逃げていいぞ。僕たちは一時間経ってから、おまえを追跡する』

一時間というと……太陽が天に達するまでの半分の半分より短くて、その半分よりは長いくらいの間かな。ふつうに歩ければ、余裕で森へ逃げ込めるけど、四つん這いじゃ無理だ。追いつかれたら、こっちは手足が使えないんだから、簡単に捕まっちゃう。

餓鬼どもは、おれを捕まえて——大人の男どもの真似をするつもりだろうか。それとも、縛られてるおれを蹴って殴って。もしかして、コルクの団栗で射って遊ぶのかな。なんにしても、縛られてさえないけりゃ負けない相手に虐められるのは、力で負けてしまう大人の

男どもに弄ばれるより、ずっとずっと悔しい。

『あまりハンディがあるとゲームにならないから、僕たちは歩いて追い掛ける』

それなら……追いつかれる前に森へたどり着けるかもしれない。森に隠れてしまえば、後はどうにでもなる。

『そら、逃げろ』

ぱちんと尻を叩かれて、おれは走り出した——と言いたいところだけど。四つん這いで、のたのたと、とにかく前へ進んだ。足よりも手が短いから、すぐにつんのめりそうになる。

そんなおれの無様な姿を餓鬼どもは嗤って眺めてる。

『走れ、走れ』

『あっという間に一時間だぞ』

『ビッチなら四つん這いでも走れるはずだぞ』

『やーい、のろまなインディアンだな』

餓鬼大将のボビーが囃し立てて、弟も街から遊びに来てる餓鬼どもも、好き勝手なことをほざいてやがる。

そんなのに、いちいち腹を立てたり屈辱を噛み締めたりはせず、おれは、懸命に這った。

おれだって馬鹿じゃないから、森の方角へ逃げたりはしない。全然違う方角へ進んで、背の高い草に遮られて、餓鬼どももボクジョウの柵も見えなくなってから、森へ向かった。

森には泥沼もある。浸かっていたら、革紐は緩む。結び目を木の枝に引っ掛けるとかすれば、ほどけるだろう——じゃなくて、必ずほどいてやる。

おれを見失ったら餓鬼どもは、森からおれたちの集落へ向かう道筋を見張るだろう。その裏をかいて、遠回りして集落へ戻って。ズンナックは名誉を重んじる。一族の娘が受けた恥辱を、必ず雪いでくれる。そんなことはないと思うけど、もしも火を噴く棒を恐れて泣き寝入りするんだったら——おれひとりでも戦う。でも、絶対にひとりじゃない。兄さんも戦ってくれる。父さんだって。

おれは、長いこと忘れていた希望を全身に甦らせて。肘と膝が擦り剥けて痛いのがなんか

無視して、森を目指した。

——四つん這いなものには利点もある。敵に見つかりにくいことだ。敵の姿が見えないうちに、おれは森へ辿り着いた。そこで、大きな見落としをしていたのに気づいた。森を囲む、棘の生えた鉄の線だ。跳び越せない。腹這いになっても、いちばん低い鉄の線に背中が引っ掛かる。

目の前が、すうっと薄くなった。ふつうに歩いて一時間の道のりを、倍よりも多くを掛けてずっと四つん這いだった。手足も腰も痛い。草原だから、膝も肘も擦り傷で済んでいるけれど、それでも血まみれ。もう……気力が尽きかけてる。くそお、こんなところでうろうろしてたら、追いつかれて、ひどい目に遭わされる。

あ、そうだ！ **ジェス**と**ダニー**がおれを捕まえたときには、木の扉を開けて外へ出たんだ。その扉は……こうなると、四つん這いでは見通しが利かない。膝立ちになってみたけど、見つからなかった。あのときは、遠くの山の見え方が、今とは違っていた。同じように見える場所まで行けば、木の扉もそこにあるはずだ。

たぶん、ずっと右の方角だ。そっちを目指して、最後の気力を振り絞って手足を動かす。

わうわう、あおん……

犬の吠える声が遠くに聞こえた。**ボクジョウ**では犬なんか飼ってなかったぞ。もしかして、街から連れて来てたんか。くそお、卑怯だぞ。罵りかけて、女の子を縛って虐めるのがいちばんの卑怯だと思い返した。白人は男も女も大人も子供も、どいつもこいつも卑怯者なんだ。大人の男でも、数に頼って、しかも火を噴く棒で脅さなけりゃ、**インディアン**の小娘ひとりを犯すこともできない臆病者だ。

わうわう……

吠え声がどんどん近づく。同じ四つん足同士じゃ、本家に勝てるわけがない。おれは逃げるのを諦めて、餓鬼どもが追いつくのを待った。

でも、現われたのは二頭の犬だけだった。おれのほうが頭が低いから、とてつもなく大きく見える。一頭は正面から、もう一頭は後ろから近づいて来る。

そうか、獲物を挟み撃ちにして逃げられなくしておいて、狩人が追いつくのを待つんだな。そう思ったんだけど。後ろから近づいて来たやつが、おれの股ぐらに鼻先を突っ込んで——濡れた鼻を割れ目にこすりつけた。

前にはもう一頭が通せんぼしてるので横へ逃げたら、しつこく追ってくる。

「うわっ……?!」

前足をおれの背中に掛けて、のしかかってくる。だけじゃない。なんか、硬い物が割れ目に突き当たる。おい、まさか……?

おれが四つん這いだから、牝犬と勘違いして——冗談じゃないぞ。うわ。前にいるやつの後足のあいだから、男棒が伸びてる。赤紫色で、ぶよぶよだかばんばんだか、人間のとはまるきり違う。

「やめろ。おれは人間だぞ！」

身体をひねって肘を振り回しても、犬に届かない。

『たすけてくれ!』

白人の言葉で叫んでみたけど、餓鬼どもが現われる気配はない。

犬と交わるなんて……気持ち悪いとは思わないけど、木の精霊チジッディ・アブレとの遊びだって、番うのと似たようなものだ。でも、こいつらは白人に飼われてる。そりゃ、ドレイだって白人に飼われてるんだし、たとえばミックがのしかかってくるけど、おれは拒んだりしない——なんてことを、考えてる場合じゃない。

『たすけてくれ! いぬに、おそわれる!』

やっぱり、おれは祖霊や精霊に護られてるんだろう。

ばあん!

火を噴く棒の音がした。そちらを見ると、馬に乗ったジェスが駆けて来る姿があった。

犬どもは白人の姿を見ると、急にお行儀良くなった。後ろのやつはおれから跳び離れて、二頭でおれを挟み撃ちにしたまま、動かなくなった。でも、おれが逃げようとする、牙を剥き出して唸る。

『ざまあねえな。いくらおまえがビッチでも、犬と媾合ったんじゃあ、抱く気が失せるから、救けてやったが——見てみたかった気もするな』

『ありがとうございます』

ずいぶんなことを言われたけど、救けてもらったのは事実だから、お礼を言った。そして、すぐに後悔して——これまでの百倍くらい、この男を憎んだ。というの。

ダニーも馬で駆けつけて来たからだった。後ろに、縛られたインディアンの女の子を引きずりながら。

「ハスビッディ……?!」

おれは叫んで、妹に駆け寄った。妹は裸だった。おれみたいに自分から脱いだんじゃないだろう。こいつらに脱がされたんだ。縛られて、わずかな距離だろうけど馬に引きずられて、あちこちの擦り傷に血が滲んでいる。

『おまえたち、ハスビッディに、なにをした!』

ジェスが肩をすくめた。

『まだ、なにもしちゃいねえさ。そうそうヴァージンを食っちゃ、ミスタ・セイバーの機嫌を損ねるからな』

おれにしたと同じことを、これから妹にもする。セイバーにさせるって意味だ。

『ハスビッディ、まだ、おんな、ない。こども。まぐわう、できない』

ジェスは羽根飾の意味を知っているはずだ。ハスビッディは、一本目の赤い羽根を付けていないんだぞ。

『だから、ミスタ・セイバーが、ハスなんとかを女にしてやるのさ』

『いもうと、いじめる。ビッチ、おまえ、ころす』

『へええ。おまえの妹だったんかい。じゃあ、あのあたりをうろついてたのは、おまえを探してのことだったのか』

警告の意味で、ハスビッディがおれの妹だと明かしたんだけど、ジェスの中の悪い心を引っぱり出したんじゃないか。言ってしまうってから後悔した。

『ハスなんかは、発音しづらいぜ。おまえがビッチなんだから、妹はプチビッチだ』

ダニーまでが同調して。

『ビッチ、プチビッチ』

言いながら、おれと妹を交互に指差した。

妹は、それを理解するどころじゃない。縛られて馬に引きずられて地面に転がされたまま、おれの変わり果てた姿を呆然と眺めている。

『面白いことをしてるな。坊ちゃんたちのアイデアだな』

そこへ、やっとボビーの一行が追いついて来た。ダニーがおれとは別の裸のインディア
ン少女を捕らえているのを見ても、ちっとも驚かない。どころか目を輝かせているのは、
玩具が二つに増えたとも思ってるんだらうな。

『面白い遊びをしていますね、坊ちゃん。おれたちも交ぜてくださいよ』

『交ぜるって……？』

ジェスは言葉では答えずに、馬から降りて妹のそばへ行った。いったん縄をほどいて、
おれと同じ形に縛り直した。

『こいつらは姉妹だそうです。ビッチとプチビッチ。二匹並べて歩かせましょうや』

『まあ、いいけど』

ボビーは、なんだかつまらなさそうだ。きっと、この後もおれを虐める遊びを、いろい
ろ企んでたんだらう。とすると、ジェスはおれを救ってくれたことに——なるもんか！

ジェスとダニーはセイバーの息子たちに馬を譲ろうとしたが、ボビーは断わった。馬に
乗って楽をするよりも、おれを虐めるほうが面白いんだらう。おれと妹は首に縄を巻かれて
——ボビーが、妹の縄を握った。逆にみそっかすのエディが、おれの縄を持つ。

『歩けよ』

ボビーが縄尻で妹の尻を強く叩いた。

ぱしん！

「痛いっ……！ なにをするの。あたしが、なにをしたというの。あなたたち白い人は、

あたしたちを……きやあつ!？」

ばちいんと、すごい音がして。妹の尻に赤黒い痣が刻まれた。

「このひとたちに逆らってはいけない。もっとひどく虐められるだけだ。悔しいけど、何をされても我慢するしかないんだ」

『おれたちに分かる言葉でしゃべれ』

ジェスの言葉にひと呼吸遅れて、エディがおれの尻を叩いた。

ぺちん。

ちっとも痛くない。妹に申し訳ない。

『ハスビッディ、おまえたち、ことば、わからない……』

『プチビッチだ。それから、御主人様だ』

ジェスが長い縄で馬上から、おれの尻を叩いた。

ばちいん!

確実に妹よりも音が大きい。

『……プチビッチ、ごしゅじんさま、ことば、わからない。ビッチ、おしえてやってる』

『それでいい』

ばちん。さっきよりも音が小さいし、痛くない。きっと、頭を撫でる代わりにのつもりなんだろう。

『エディ坊ちゃん。叩くなら、これくらいじゃないと効きませんよ』

ばちいん!

最初と同じくらいに痛かった。おれの尻は……玩具なんだろうな、こいつらにとっては。

『だって、僕、まだ小さいから』

『じゃあ、これを貸してやるよ』

ボビーが火を噴く短い棒をエディに持たせた。

『コルク弾だ。こいつで射ってやれ。一箱持って来てるから、ばんばん射っていいぞ』

くそ、やっぱり企んでやがったな。

射たれるのはもちろん厭だけど、それよりも。妹が叩かれぬように、おれが手本を示してやらなければ。すこし休んだから、もう疲れてなんかいないぞ。おれはちびの**エディ**を引っ張って、ずんずん前へ進んだ。**ポビー**も追い抜いて、妹に並ぶ。

「ハスビッディ。つらいし苦しいし惨めだけど、白人に逆らったら、もっと痛くてつらくて苦しくて惨めで羞ずかしい目に遭わされるんだ。姉ちゃんについで」

聞き咎められないように小声で囁いて、ほんのわずかだけ妹の先に出た。ちょこまかと手足を動かす妹の速さにあわせてやると。

ぱん！

さっそくに尻を射たれた。殺されるんだという恐怖がなくなってみると、**セイバー**の鞭と同じくらいの痛みしかない。しかじゃないぞ。妹だったら確実に泣き喚く激痛だ。

おれがすこし速く這うと、妹はついて来れない。

ばちいん！

「きゃああっ……！」

ぱん！

エディも面白がって射つ。

『偉いぞ、**エディ**。連帯責任ってやつを、教えてやれ』

おれと妹、どちらが遅れても二人とも痛い目に遭わされるということだ。

ボクジョウへ帰り着くまでに、おれも妹も尻がどす黒くなるまで虐められ続けた。

続きは製品版でお楽しみください